

第21回 下田歌子賞受賞作品集

夢

ゆめ

主催

恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会
岐阜県恵那市・恵那市教育委員会

学校法人実践女子学園

共催

株式会社PH P研究所

後援

岐阜県教育委員会・多治見市教育委員会

土岐市教育委員会・瑞浪市教育委員会

中津川市教育委員会

東京都日野市・日野市教育委員会・嚶鳴協議会

第21回 下田歌子賞受賞作品集



はじめに

惠那市長
小坂喬峰こさか たかね

先人顕彰事業「下田歌子賞」は、惠那市出身で近代女子教育の先駆者であり、歌人としても名高い下田歌子先生の生誕百五十年を記念し、平成十五（二〇〇三）年度から開催して今年で二十一回目となりました。

今回も「夢」をテーマに募集したところ、全国からエッセイ部門で一七四一点、短歌部門で二八三五点と、昨年を三二三点上回るご応募をいただきました。

授業や夏休みの課題として取り上げ、多数の作品を出品していただきました学校関係者を含め、当事業の趣旨にご賛同いただき、ご提出いただいた皆様方に心より感謝申し上げます。

作品は全て実行委員会にて厳正な事前審査を行なった後、作家の童門冬二先生、東洋大学名誉教授の吉田公平先生、元宝塚歌劇団で恵那観光大使の初風緑先生、実践女子大学・実践女子大学短期大学部学長の難波雅紀先生、PHP研究所・月刊誌「歴史街道」特別編集委員の寺田昭一先生にご協力をいただき、選考を行いました。

私も選考委員の一人として、お寄せいただいた作品を拝読しましたが、本当に甲乙付け難い優れた内容ばかりであり、審査に力が入りました。

こどもたちの作品の中には世界に目を向けられるものも多く、長引く戦争により罪のない尊い命が失われていることへの悲しみや、環境問題やSDGsの取り組みに関心を持ち、自らで何をすべきか考え、強い信念をもって行動する頼もしい姿などを感じることができました。

また、こどもたちが描く「夢」は、時代の流れとともに変化するのはもとより、いつの時代も家族などの身近な方々が社会を支えていることに憧れを持ち、その背中を作品にされている姿が強く印象に残りました。

下田先生の歌である「綾錦あやじき着てかへらずみくにやま三國山 またふたたびは越えこじぞと思おもふ」（胸に抱いている夢と志を果たすまでは、故郷に通じる三國山を越えて帰京しない）は、時代を超えて今に通じる先生からのメッセージであり、その思いが詰まったこの作品集を一人でも多くの方の生き方、考え方の参考書としてご活用いただければ幸いです。

結びに、事業実施にあたり、ご協力をいただきましたすべての皆様方に心より御礼申し上げます。

第21回 下田歌子賞受賞作品集【目次】

※小学生の部・中高生の部の住所は学校所在地です。

はじめに

恵那市長 小坂 喬峰

選考評

読者は誰か

東洋大学名誉教授

吉田 公平

今しか書けない情熱を大切に

元宝塚歌劇団・恵那観光大使

初風 緑

言葉の力

実践女子大学・実践女子大学短期大学部学長

難波 雅紀

人さまのために、自分のために

月刊誌「歴史街道」特別編集委員

寺田 昭一

募集要項

10／受賞者一覧

11／学校賞受賞校、選考委員、主催・共催・後援

12

下田歌子先生のこと 24／原点は「自分・家族・家庭」

38

作家 童門 冬二

小学生の部

◇短歌の部

【最優秀賞】

岐阜県恵那市 小栗 充貴

【優秀賞】

岐阜県恵那市 宮澤 煌成

【入選】

岐阜県恵那市 今井 蒼偉／東京都日野市 岡野 智哉／岐阜県恵那市 横光 きなり

◇エッセイの部

【最優秀賞】

おじいちゃんの野菜を使って

●岐阜県恵那市

牧野 友祐

【優秀賞】

もう一つのゆめ

●岐阜県恵那市

今井 陽菜乃

優しい人になりたい

●鹿児島県志布志市

末弘 みゆ

将来の夢

●岐阜県恵那市

堀井 健成

【佳作】

将来の夢

●岐阜県恵那市

伊東 里依紗

プログラマーになるために

●岐阜県恵那市

小木 曾 咲月

絵本作家

●岐阜県恵那市

近藤 里虹

前向きにがんばり通訳に！

●岐阜県恵那市

西尾 彩希

わたしのゆめ

●岐阜県恵那市

山本 笑輪

【囀鳴協議会賞】

わたしのゆめ

●岐阜県恵那市

山本 笑輪

22 21 21 20 19 18 18 17 16 16 15 14 14

中高生の部

◇短歌の部

【最優秀賞】

●東京都小平市 大友結衣

.....

26

【優秀賞】

●東京都小平市 山岡咲葉

.....

26

【入選】

●岐阜県恵那市 安藤 摩斗生／●岐阜県恵那市 瀨瀬 わか／●神奈川県横浜市 小嶋 涼香

.....

27

◇エッセイの部

【最優秀賞】

夢.....

.....

28

【優秀賞】

今日も私は学校へ行く.....

.....

29

【佳作】

みんなが使いやすいように.....

.....

30

祖父からの宿題く私の夢.....

.....

31

世界の平和と安全を守るために.....

.....

32

長生きすること.....

.....

33

地域の役に立てるように.....

.....

34

私の居場所.....

.....

35

誰かの生活の一部に.....

.....

36

一般の部

◇短歌の部

【最優秀賞】

●千葉県市川市 小田中 準一

.....

40

【優秀賞】

●岐阜県恵那市 鵜澤 忍

.....

40

【入選】

●徳島県小松島市 谷本 良裕／●愛知県稲沢市 村上 亜祐美／●岐阜県恵那市 山村 はつみ

.....

41

◇エッセイの部

【最優秀賞】

夢見た夢.....

.....

42

【優秀賞】

私の応援歌.....

.....

43

それぞれの夢.....

.....

45

夢の空を飛ぶとき.....

.....

47

【佳作】

転回場.....

.....

48

戦国武将という仲間たち.....

.....

50

出会えた夢.....

.....

52

この一筋につながる.....

.....

53

嚶鳴協議会と嚶鳴協議会賞

23／下田歌子賞について

56／各回のテーマと応募数一覧

58

※一般の部受賞作品は8作品とする（令和6年7月26日更新）

【選考評】

読者は誰か

東洋大学名誉教授

よしだ こうへい
吉田 公平



エッセイをお書きになられたとき、誰を読者に想定してお書きになられていますか？ 顕彰エッセイの場合は、まずは選考委員の先生方を想起される方もおありかと思えます。しかし、選考委員の一人ひとりについて熟知されているわけではありませんから、選考委員のことは二の次にして、どなたを想定されますか？

先生・指導教官・一般読者・友人・肉親など、人それぞれ様々であると思います。しかし、読むかも知れない人の中で忘れてはならないのは、もう一人の「私」です。一通り書き上げたときに、読み返して推敲する「もう一人の私」がいます。

書き上げた後に、それが選抜されて受賞作品集に印刷されたときに、一般の未知の人に読まれることもあります。読んだ人はこの未知のエッセイを読んで、その人なりの感慨を覚えることでしょう。もう一人、その冊子を読み返す人がいます。「私」です。将来の、未来の「私」です。未来の「私」にとって、この作品集に掲載されたエッセイは、その時の「私」の心象風景を物語る貴重な「資源」になります。印刷されたこの「資源」は「私」一人のものではありません。みんなの思索資源なのです。一個人の心象風景を記した短文ながら、その時代の気風を物語る貴重な証言なのです。皆さんが書いてみようと思いつて書き上げたエッセイは、印刷されて冊子になると、かけがえのない一財産となります。自分の作品も、他の人の作品も改めて読み返してください。

吉田 公平

昭和十七（一九四二）年、宮城県岩沼市生まれ。東洋大学名誉教授。中国哲学・日本近世思想史専攻。「陽明学」を中心に西洋思想と比較、今日的な意義を探究する。現在は、岩沼を拠点に中国思想、日本思想の研究・啓蒙活動を展開。「陸象山と王陽明」「日本における陽明学」など著書多数。

【選考評】

元宝塚歌劇団・恵那観光大使

今しか書けない情熱を大切に

初風 緑
はつかぜ みどり



下田歌子賞、審査員として関わらせて頂いて、早いもので七年目を迎えました。毎年、皆様のエッセイ・短歌を楽しみに過ごし、本年も多くの作品が寄せられた作品を本気で審査させて頂きました。

私個人の評価としては、どの作品も優秀賞。

文章からのメッセージ性。本人の筆記文字からのエネルギー。小学・中学・高校生の構成と祈りが胸を打ちました。一般の部では、光景が広がるなど……。今年は本当に最優秀賞を選考することが難しかったです。受賞者の方々、本当におめでとうございました。

また、受賞に届かなかった皆様も、私からは特別賞をお届けしたいと思います。

これをきっかけに、一年に一回、ご自分のエッセイを書き続けることで、目に見えるご自身の成長・変化を残してみたいかがでしょうか？

今しか書けない情熱を今後にも大切にお過ごし頂きたいと思っております。
皆様の夢が煌めくことを心よりお祈り申し上げます。

初風 緑

実践女子学園中学校・高等学校を卒業後、昭和六十三（一九八八）年、宝塚歌劇団に入団し男役スターとして活躍。確かな演技力と伸びやかなダンスで観客を魅了。平成十七（二〇〇五）年に退団した後、テレビや舞台で活躍。ストレッチ・バレエスタジオ「上野毛 G1 Studio」を主宰する他、実践女子大学の講師等も務める。令和二（二〇二〇）年より恵那観光大使。

【選考評】

言葉の力

実践女子大学・
実践女子大学短期大学部学長

難波 雅紀
なんば まさのり



「夢」をテーマに書かれた、いろいろなエッセイと短歌を読ませていただきました。はじめに小学生の作品ですが、エッセイは、素直な気持ちが良く表現されていて、書き手の想いがしみじみと伝わってくるものが多くありました。欲を言えば、夢を実現するために自分はどうな努力をするのか、もう少し具体的に書いても良かったと思います。短歌は、明るい希望と強い決心が、素直に、淡々と表現されていて、好感の持てる作品がいくつもありました。

次に中高生の作品です。エッセイは、他者との係わりで芽生えた問題意識の解決を自分の「夢」に繋^{つな}げているものが主でした。文章には気迫があつて説得力が感じられました。短歌には、諦^{あきら}めや絶望と背中合わせにあつても、「夢」の実現に向かって恐れずに進んでいくとする静かな決意が見られました。

最後に一般の部では、エッセイには、年齢を重ねてなお新しい「夢」の実現に向かう熱意に溢^{あふ}れているものや、他者の「夢」の実現を後押しすることへの素直な思いやりと、強い決意が伝わってくるものなどがありました。どれもバランスの良い、分かりやすい文章で書かれていました。また、短歌では、少ない言葉の中に凝縮されている、語らずにはいられない想いが強く伝わってくるものもありました。

言葉は脆^{もろ}く儂^{はかな}い一方で、鋭く力強くもあります。その言葉の力を信じ、自分の「夢」を伝えようとする語り手の真摯^{しんし}な姿勢に、とても感銘を受けました。今回、読ませていただいたエッセイと短歌は、どれもみな個性的で、素敵なものばかりでした。読む機会を与えていただいたことに心から感謝しています。

難波 雅紀

昭和六十三（一九八八）年、上智大学大学院文学研究科英米文学専攻博士前期課程修了。平成十五（二〇〇三）年から実践女子大学文学部英文学科教授、平成二十九（二〇一七）年から副学長、令和三（二〇二一）年から学長を務めている。専門はアメリカ文学・文化。『アメリカの嘆き——米文学史の中のピューリタニズム』『英米文学のリヴァーヴ——境界を超える意志』『アメリカ文学案内』などの共著がある。

【選考評】

月刊誌「歴史街道」特別編集委員

寺田 昭一
てらだ しょういち



人さまのために、自分のために

昨年に続いて、本年度も、「夢」をテーマにした素晴らしいエッセイと短歌を読ませていただくことができました。まずは、応募いただいた皆さんに御礼を申し上げます。昨年、本年と、同じ「夢」というテーマで作品を読ませていただいて感じたことがあります。介護や病氣、天災や戦争（争い）など、厳しい現実——場合によっては「いのち」そのものを脅かすような——切実な現実を背景にした作品が多いのは昨年も今年も同じですが、今年は、全般的にどこか明るく、明日への信頼というか期待を感じさせてくれる作品が多くなったように思いました。新型コロナウイルスが五類に移行し、移動も自由になるなど、コロナ禍が収束してきたことも一因かも知れません。

応募作品には、作者自身の夢が描かれています。その夢は、世界で活躍する通訳であったり、看護師であったり、パン屋さんであったり、獣医や科学者であったりと様々ですが、共通して、それぞれの夢の底流に、「誰かさんを喜ばせたい」「誰かさんの役に立ちたい」（人を笑顔にすることも含め）という思いが流れていることに感動しました。その意味では、「人さまのために、自分のために」という夢がいっぱい詰まっているこの受賞作品は、応募者の皆様からいただいた心の宝物です。ありがとうございました。

寺田 昭一

昭和三十三年（一九五七年）、大阪生まれ。大阪外国語大学（現：大阪大学）ロシア語科卒業後、PHP研究所に入社。文芸書、教養新書等の一般単行本編集の後、昭和六十二年（一九八七年）、月刊誌「歴史街道」創刊メンバー。その後、同誌編集長、PHP総研シニア・コンサルタント（歴史まちづくり担当）を経て、令和三年（二〇二一年）、PHP研究所を退職。現在、フリーランスとして月刊誌「歴史街道」特別編集委員、嚶鳴協議会スーパバイザー等を務めている。

第21回 下田歌子賞 募集要項

■テーマ 夢

「綾錦^{あやにしき} 着てかへらずば 三国山^{みくにやま} またふたびは 越えじとぞ思ふ」(胸に抱いている夢と志を果たすまでは、故郷に通じる三国山を越えて帰郷しない)——わが国近代女子教育の先駆者と言われる下田歌子先生は、大きな夢と志を抱いて16歳でふるさと岩村(今の岐阜県恵那市岩村町)を離れ、東京へと旅立ちました。

あなたには、どんな「夢」がありますか? その夢に何を託し、どんな明日を思い描いていますか? 夢を実現するために、今、考えていること、行なっていることはありますか?

あなた自身のこと、家族や友人・知人のこと、明日の世界や日本、地球や人類のこと……「夢」をテーマに、あなたの想いを綴ったエッセイと短歌を募集します。

【エッセイの部】

募集テーマに沿って、具体的なエピソードを添えた作品をお寄せください。(1人1作品に限ります)

◎原稿枚数 一般の部 ◇2,000字程度(400字詰原稿用紙5枚程度)

中高生の部 ◇1,200字程度(400字詰原稿用紙3枚程度)

小学生の部 ◇800字程度(400字詰原稿用紙2枚程度)

◎応募期間 令和5年(2023)年6月7日(水)～9月7日(木)(当日消印有効)

◎各賞

<一般の部>

◆最優秀賞 1編
正賞、副賞(賞金10万円)

◆優秀賞 3編
正賞、副賞(賞金3万円)

◆佳作 5編
正賞、副賞(賞金1万円)

<中高生の部>

◆最優秀賞 1編
正賞、副賞(図書カード1万円分)

◆優秀賞 3編
正賞、副賞(図書カード5千円分)

◆佳作 5編
正賞、副賞(図書カード3千円分)

<小学生の部>

◆最優秀賞 1編
正賞、副賞(図書カード5千円分)

◆優秀賞 3編
正賞、副賞(図書カード3千円分)

◆佳作 5編
正賞、副賞(図書カード2千円分)

※上記各賞以外で、とくに努力が認められる作品に「嚶鳴協議会賞」を授与

【短歌の部】

募集テーマに沿った短歌をお寄せ下さい。(1人1首に限ります)

◎各賞

<一般の部>

◆最優秀賞 1首
正賞、副賞(賞金2万円、記念品)

◆優秀賞 1首
正賞、副賞(賞金1万円、記念品)

◆入選 3首
正賞、副賞(賞金5千円、記念品)

<中高生の部>

◆最優秀賞 1首
正賞、副賞
(図書カード5千円分、記念品)

◆優秀賞 1首
正賞、副賞
(図書カード3千円分、記念品)

◆入選 3首
正賞、副賞
(図書カード2千円分、記念品)

<小学生の部>

◆最優秀賞 1首
正賞、副賞
(図書カード3千円分、記念品)

◆優秀賞 1首
正賞、副賞
(図書カード2千円分、記念品)

◆入選 3首
正賞、副賞
(図書カード千円分、記念品)

◎応募期間 令和5年(2023)年6月7日(水)～9月7日(木)(当日消印有効)

【学校賞】

エッセイの部、短歌の部いずれか、または両方に学校で取り組み応募作品が顕著に多い学校に、学校賞を贈呈。

■表彰式

令和6年(2024)1月27日(土) 実践女子学園(東京都渋谷区)で表彰式

*「一般の部」最優秀賞受賞者、「中高生の部」「小学生の部」最優秀賞・優秀賞受賞者と保護者1名をご招待

*録画映像配信

第21回 下田歌子賞 受賞者一覧

エッセイの部 テーマ「夢」

■小学生の部

(氏名50音順 応募総数：239作品)

賞	作品タイトル	氏名	学校名・学年
最優秀賞	ぼくの夢	牧野 友祐	岐阜県恵那市立長島小学校6年
優秀賞	もう一つのゆめ	今井 陽菜乃	岐阜県恵那市立長島小学校4年
	おじいちゃんの野菜を使って	末弘 みゆ	鹿児島県志布志市立有明小学校4年
	優しい人になりたい	堀井 健成	岐阜県恵那市立岩田小学校6年
佳作	将来の夢	伊東 里依紗	岐阜県恵那市立長島小学校6年
	将来の夢	小木曾 咲月	岐阜県恵那市立長島小学校5年
	プログラマーになるために	小栗 凱成	岐阜県恵那市立長島小学校5年
	絵本作家	近藤 里虹	岐阜県恵那市立山岡小学校6年
	前向きにがんばり通訳に！	西尾 彩希	岐阜県恵那市立岩田小学校5年
囃鳴協議会賞	わたしのゆめ	山本 笑輪	岐阜県恵那市立長島小学校1年

■中学生の部

(氏名50音順 応募総数：1,297作品)

賞	作品タイトル	氏名	学校名・学年
最優秀賞	夢	桶谷 知礼	東京都・実践女子学園中学校2年
優秀賞	今日も私は学校へ行く	河合 里央羅	岐阜県恵那市立岩田中学校3年
	みんなが使いやすいように	古林 実桜	東京都・実践女子学園中学校2年
	祖父からの宿題～私の夢	前川 菜々子	岐阜県・多治見西高等学校1年
佳作	世界の平和と安全を守るために	上山 理子	東京都・実践女子学園中学校1年
	長生きすることで	北嶋 詢	東京都・広尾学園高等学校2年
	地域の役に立てるように	縹緗 璃愛美	岐阜県恵那市立恵那北中学校1年
	私の居場所	塩尻 晏史采	大阪府立水都国際高等学校1年
	誰かの生活の一部に	志茂 采実	東京都・実践女子学園中学校1年

■一般の部

(氏名50音順 応募総数：205作品)

賞	作品タイトル	氏名	住所
最優秀賞	夢見た夢	本田 美徳	大阪府寝屋川市
優秀賞	私の応援歌	後藤 里奈	東京都杉並区
	それぞれの夢	栄 直美	愛媛県松山市
	夢の空を飛ぶとき	古川 晴菜	神奈川県小田原市
佳作	転回場	相野 正	大阪府堺市
	戦国武将という仲間たち	郭 瑞昕	東京都多摩市
	出会えた夢	佐藤 寿江	滋賀県栗東市
	この一筋につながる	三宅 隆吉	福岡県飯塚市

短歌の部 テーマ「夢」

■小学生の部

(氏名50音順 応募総数：1,279作品)

賞	作 品	氏名	学校名・学年
最優秀賞	あざやかに にぎろいっかん わざをこめ ぼくはせかいの すしよくにん	小栗 充貴	岐阜県恵那市立岩田小学校1年
優秀賞	夢はなに 聞かれてみても 分からない もう少しだけ 子供でいたい	宮澤 煌成	岐阜県恵那市立岩田小学校6年
入選	ぼくの夢 コップになって かなえるよ 食たくかこむ みんなの笑顔	今井 蒼偉	岐阜県恵那市立大井第二小学校5年
	ぼくのゆめ ピアノにのせて ひびかせる 心うごかす 音かなでたい	岡野 智哉	東京都日野市立南平小学校5年
	海を越え 各地の人に 届けたい きれいな水と 優しい心	横光 きなり	岐阜県恵那市立明智小学校6年

■中学生の部

(氏名50音順 応募総数：1,135作品)

賞	作 品	氏名	学校名・学年
最優秀賞	憧れて 教師になると 決めた時 待っているねと 恩師の言葉	大友 結衣	東京都・白梅学園高等学校1年
優秀賞	自分だけ 咲かぬ花だと 焦らずに 信じて進め 寄り道しつつも	山岡 咲葉	東京都・白梅学園高等学校2年
入選	ぼくの夢 人を助ける 消防士 父にあこがれ 9年間	安藤 摩斗生	岐阜県恵那市立串原中学校1年
	やさしくて 笑顔あふれる 保育士を 短冊にたくし 努力続ける	縹緗 わか	岐阜県恵那市立恵那北中学校2年
	言の葉を 清く育てる 我が母の 背を見て育つ 夢は詩人	小嶋 涼香	神奈川県立川和高等学校3年

■一般の部

(氏名50音順 応募総数：421作品)

賞	作 品	氏名	住所
最優秀賞	孫の背を 流せば泡の 湧き出でて シャボン玉飛ぶ 夢の数だけ	小田中 準一	千葉県市川市
優秀賞	笑顔さく こども食堂 ひらく夢 明日へと繋ぐ 生きる力を	鷗澤 忍	岐阜県恵那市
入選	雑踏に 生歌叫ぶ 若き娘よ かじかむ指で 夢を爪弾く	谷本 良裕	徳島県小松島市
	綿毛にも 夢があるから 風に乗る どこであろうと 咲いてみせると	村上 亜祐美	愛知県稲沢市
	使いこんだ グローブ手にし 継続は 力なりだと 君から学ぶ	山村 はつみ	岐阜県恵那市

第21回 下田歌子賞 学校賞受賞校

学校賞は、「エッセイの部」「短歌の部」いずれか、もしくは両方に、学校で取り組んでいた
 だき、応募数が顕著に多かった学校に授与させていただく賞です。

	学校名	所在地	受賞対象部門
小学校	恵那市立岩邑小学校	岐阜県恵那市	エッセイ・短歌
	恵那市立長島小学校	岐阜県恵那市	エッセイ・短歌
	恵那市立恵那北小学校	岐阜県恵那市	短歌
	恵那市立大井第二小学校	岐阜県恵那市	短歌
	恵那市立上矢作小学校	岐阜県恵那市	短歌
	恵那市立串原小学校	岐阜県恵那市	短歌
	恵那市立東野小学校	岐阜県恵那市	短歌
	日野市立南平小学校	東京都日野市	短歌
中学校	恵那市立恵那北中学校	岐阜県恵那市	エッセイ・短歌
	恵那市立岩邑中学校	岐阜県恵那市	エッセイ
	実践女子学園中学校	東京都渋谷区	エッセイ
	恵那市立明智中学校	岐阜県恵那市	短歌
	恵那市立串原中学校	岐阜県恵那市	短歌
高等学校	岐阜県立恵那農業高等学校	岐阜県恵那市	エッセイ・短歌
	多治見西高等学校	岐阜県多治見市	エッセイ
	岐阜県立恵那南高等学校	岐阜県恵那市	短歌
	白梅学園高等学校	東京都小平市	短歌

第21回 下田歌子賞 選考委員

童門 冬二 ◎作家（選考委員長）
 吉田 公平 ◎東洋大学名誉教授
 初風 緑 ◎元宝塚歌劇団・恵那観光大使
 難波 雅紀 ◎実践女子大学・実践女子大学短期大学部学長
 寺田 昭一 ◎月刊誌「歴史街道」特別編集委員
 小坂 喬峰 ◎岐阜県恵那市長

第21回 下田歌子賞 主催・共催・後援

【主催】 恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会
 岐阜県恵那市・恵那市教育委員会
 学校法人実践女子学園

【共催】 株式会社P H P 研究所

【後援】 岐阜県教育委員会・多治見市教育委員会・土岐市教育委員会・瑞浪市教育委員会
 中津川市教育委員会
 東京都日野市・日野市教育委員会
 嚶鳴協議会（大野町〈岐阜県〉、沖縄市〈沖縄県〉、小田原市〈神奈川県〉、釜石市〈岩手県〉、
 木曽町〈長野県〉、高鍋町〈宮崎県〉、多久市〈佐賀県〉、日田市〈大分県〉、東海市〈愛知県〉、
 養父市〈兵庫県〉、米沢市〈山形県〉、恵那市）

第
21
回
下
田
歌
子
賞
受
賞
作
品

小学生の部

「夢」の歌

最優秀賞

あざやかににぎろいっかん わざをこの
ぼくはせかいのすしよくにん 小栗充貴詠



あざやかに にぎろいっかん わざをこめ
ぼくはせかいの すしよくにん

岐阜県恵那市立岩邑小学校一年

小栗 充貴

優秀賞

夢はなに 聞かれてみても 分からない
もう少しだけ 子供でいたい 宮澤煌成詠



夢はなに 聞かれてみても 分からない
もう少しだけ 子供でいたい

岐阜県恵那市立岩邑小学校八年

宮澤 煌成

入 選

ぼくの夢 コックになって かなえるよ
食たくかこむ みんなの笑顔 今井蒼偉 詠

ぼくの夢 コックになって かなえるよ
食たくかこむ みんなの笑顔

岐阜県恵那市立大井第二小学校五年 今井 蒼偉

入 選

ぼくのゆめ ピアノにのせて ひびかせる
心うごかす 音かなでたい 岡野智哉 詠

ぼくのゆめ ピアノにのせて ひびかせる
心うごかす 音かなでたい

東京都日野市立南平小学校五年 岡野 智哉

入 選

海を越え 各地の人に 届けたい
きれいな水と 優しい心 横光きなり 詠

海を越え 各地の人に 届けたい
きれいな水と 優しい心

岐阜県恵那市立明智小学校六年 横光 きなり

ぼくの夢

岐阜県恵那市立長島小学校六年

牧野 友祐^{まさの ゆうすけ}

ぼくの将来の夢は、科学者です。科学者の仕事は大学や研究所で新たな発見をすることです。物理学、化学、生物学、天文学などの研究をして論文にまとめて学会で発表する仕事です。ぼくが科学者になりたいと思ったきっかけは、テレビやYouTubeなどを見て、一瞬で色が変わったり、一瞬で液体があふれたりする動画を見て、面白いと思ったからです。日常生活にある化学現象で、例えば、鉛筆を揺らすとぐにやぐにや曲がったように見えるのは、ラバー・ペンシル・イリユージョンという名前です。これの原理は人間は早い物を認識するのが苦手だから、早く動く物に残像が見えたり連続した絵をパラパラすると絵が動いたように見えたりするのも、これが原因です。鉛筆を揺らすと、動きが早い部分と遅い部分が生まれることで、この錯覚を起こしています。こういう日常の中で起きる化学現象を見つけて、この原因を見つけないです。

ぼくは科学者になるために、理科や、化学の本を読んだり、簡単な実験キットをしたりしています。他には、気になった化学現象のことをネットなどで調べて、家族などに教えたりしています。

ぼくが科学者の中で憧がれている人は、トーマス・エジソンです。エジソンの有名な発明品の中で三大発明と言われるのが、蓄音

機、白熱電球、電話というものです。白熱電球は電気を通すと高温

になりそれが光ることで灯りがつきました。そして当時使われていたフィラメントは、すぐ燃えつきてしまうので長い時間つきませんでした。エジソンは日本の竹を使うと成功しました。蓄音機は音を録音と再生ができる機械です。エジソンは電話も発明しました。当時の電話はエジソンじゃない人が発明したけど、その人が作った電話は短い距離しか電話ができませんでした。でも、エジソンの発明した電話は長距離で電話ができました。このような実験でエジソンは何回も失敗して、失敗してもあきらめずに何回も実験をしていて成功させてすごいなと思いました。このようにエジソンみたいに失敗しても、何回も実験をして成功するまでして、新しい発見をしたいです。

優秀賞

もう一つのゆめ

岐阜県恵那市立長島小学校四年 今井 陽菜^{いまい ひなの}

わたしは、年中からずっと、パティシエになりたいというゆめがあります。自分で、作ったものを、よろこんで、うけとってくれるのが、わたしは、うれしいからです。

しかし、今年の三月にとつぜんおなかがいなくなつて、病院で検査をしたところ、「胆道拡張症」という、先天性の病気であるこ

おじいちゃんの野菜を使って

鹿児島県志布志市立有明小学校四年 末弘 すえひろ みゆ

とが分かりました。この病気は、手術が必要で、五月の終わりには入院して手術をしました。手術をすると決まった時は、すごく不安でこわかったです。手術をする当日もこわくて、なみだが出てきました。そんな時には、先生やかんごしさんがはげましてくれました。手術が終わった後も両手に点てきがついていて、鼻とおなかには、管が通っていたのでとても苦しくて落ち着きませんでした。わたしが落ち着くまでかんごしさんは、夜中でもナースコールをおすと、何回も来てくれました。

手術が終わって三日ぐらいたつと、点てきや管がぬけてすごく楽になりました。そのころになると教育実習生の女の子がわたしのたんとうになって、わたしの好きなことを話した次の日には、それをクイズにして来てくれたり、トランプを用意して遊んでくれました。トイレやおふろに行くときも、いっしょについてきてくれました。体があまり動かなくて起き上がれない時は、手つだつてくれました。自分で動くとしても、自由に動かなくてびっくりしたし、一人では歩くこともできませんでした。大きな病気になってはじめて、今まであたり前にしてきたことができないことのつらさを知りました。そして、そんなつらい時にたすけてくれるかんごしさんの仕事を始めて近くで見て、わたしもこんなふうになをたすけたいと思うようになりました。

今も、パティシエというゆめものこっているけれど、かんごしになりましたと思うようにもなりませんでした。

これが「もう一つのゆめ」です。

わたしは、料理を作って食べることが大好きで、しょう来は、弁当屋さんになりたいです。それは、川内のおばあちゃんが弁当屋さんだからです。ときどき手伝いに行きます。朝早く起きて、じゅんぴしたに物やからあげ、玉子焼きなどをつめる手伝いをします。おばあちゃんの料理は味つけがおいしいです。おじやったモールという店におばちゃんと配達に行きます。弁当は毎日全部売れます。

志布志のおじいちゃんは、野菜作りがとても上手で、毎日畑に行き、多くの種類の野菜を育てています。今年は、すいか、なす、きゅうり、にがうり、ピーマン、オクラなどを作りました。わたしは、おじいちゃんの野菜を収かくするのが大好きです。でも、収かくするまでにはいろいろな作業があり、野菜の手入れは、とても大変そうです。夏はとても暑いので、夕方おじいちゃんの家に行くところか、れてねていることもあります。「野菜作りは本当に大変なんだなあ」と思います。そんなおじいちゃんの野菜を食べる時は、残さず食べようという気持ちになります。今年一番おいしかった野菜はすいかでした。すいかは収かくするまでの日数とタイミングがむずかしいそうです。収かくのときはどきどきするそうです。すいかをわってきれいにうれている時は本当にうれしいです。わたしは、すいかを

優秀賞

優しい人になりたい

岐阜県恵那市立岩田小学校六年 堀井 健成

ぼくの夢は、優しい人になることです。困っている人がいたら助けてあげたり、一人ぼっちの子がいたら優しく声をかけたり、遊んだりしてあげる人です。

どうして優しい人になりたいのかというと二つ理由があります。僕は、分団登校の時よく嫌なことを言われて、泣いたり怒ったりしていました。その時は、悲しくて言葉が出ませんでした。その時、先生が僕の話聞いてなぐさめてくれました。僕は、心がスッキリしました。だから、その先生みたいな優しい人になりたいと思いました。

二つ目のわけは「わたしの足は車いす」という本を読んで、優し

さが、どんな人も幸せにすることがわかったからです。主人公の女の子は、足が麻ひしっていて車椅子に乗っています。お母さんにお使いを頼まれて一人で町に行く中、道の段差で歩道に上がれなかった時、太った男の子に手伝って上げてもらいました。女の子はうれしくなってお礼を言いました。でも、足が麻ひしていても、できることをかわいそうと思ってやってもらうことには、怒ったり悲しんだりしました。だから、優しさというのは、ただ、やってあげることでなく、その人のことや気持ちを考えて、必要なことをやってあげることだと思いました。

今の僕は、ちょっと優しさが足りないと思います。それは、まだ人の気持ちがよくわからない時があるからです。それにイライラしている時には、優しくできない時があります。だから、どんな時でも優しくなれるように、イライラをおさめる方法を試したり、深呼吸して心を落ち着かせたりしています。人の気持ちは全部はわからないけど、人の気持ちをわかろうと努力する優しい人になりたいです。

佳作

将来の夢

岐阜県恵那市立長島小学校六年 伊東 里依紗

私の将来の夢は、獣医さんになることです。

獣医さんの仕事はすごく大変で、動物が怪我や病気で苦しんでいるのを助けたりする仕事です。

獣医さんになろうと思ったきっかけは、私は動物が好きでよく動物の番組を見ていて、動物が怪我や病気で苦しんでいるところを見て、「動物たちを助けたい」という気持ちになったことです。

初めは、動物を保護する仕事をする人になりたかったけど、保護するだけでは怪我や病気で苦しんでいる動物を助けられないと思うから、獣医さんの資格があれば動物を保護するだけでなく、動物を助けられると思ったからです。

動物は、怪我や病気だけでなく、食べ物を与えられなかったり、汚れを落さずにいると、苦しんでしまったり、死んでしまうことにつながってしまいます。

でも動物を助けるというのはものすごく大変で、動物についていろいろなことを知っておかなければいけません。動物は人間と違って喋れないから鳴き声や表情で私たちに気持ちを伝えようとしています。

例えば、犬は相手をじっと見つめて大好きという気持ちを表します。お腹を見せている時は触ってほしいという気持ちの時です。他にも前足をなめている時はひまな時、歯をむき出してる時は、噛むぞという時などいろいろなことを鳴き声や表情で表しています。

でも、犬やねこなど全部の動物が同じように鳴いて気持ちを表すわけではないからいろいろな動物の気持ちの表し方を知れるようになります。

そのために、私はもともと勉強しなければいけません。動物にはどのような病気があるのか、どうしたら幸せに生きていけるのかなどを知る必要があります。

私は今から夢に向かって出来ることは、本やインターネットなどで動物について調べることです。獣医さんになるという夢に少しでも近づけるよう努力をし、病気などで苦しんでいるたくさん動物を助けられるようにしたいです。

佳作

将来の夢

岐阜県恵那市立長島小学校五年

小本曾 咲月

私の将来の夢は、トリマーになることです。トリマーとは、ペットの美容師といって、主に犬をきれいにする仕事をします。

私がトリマーになりたいと思った理由は、私は犬が大好きで、家でも犬を二匹飼っています。そして、三カ月に一度はトリミングに連れていき、きれいにしてもらっています。その時に、トリマーさんの働いている姿を見て、かっこいいなあと思って、なりたと思いました。こわがっている犬や、おこっている犬や大きな犬、とても小さな犬など、いろいろな犬にもやさしくシャンプーや、カットやつめきりなどをしている、すごいなあと思いました。

この前、家で飼っている犬のシャンプーとつめきりを、お母さん

に手伝ってもらいながらやりました。いつもおとなしくて、おりこ
うな犬なのに、シャンプーをしようとするといやがって、にげよう
とするし、体をブルブルとさせて、その水しぶきがかかって、自分
までベタベタになりながら洗いました。その後のドライヤーも大き
な音にこわがったり、つめきりもあばれてお母さんがいなかったら
できませんでした。とても大変でした。

トリマーになるためには、犬のことをちゃんと勉強して犬のいろ
いろな事を知らなくてはいけないと思いました。なので私は、高校
を卒業したら、トリマーになるための専門学校へ行って、カットの
技術や知識を身につけたいと思っています。そこで学んだことを生
かして働きたいです。

私は犬をきれいにしてあげるだけではなく飼い主さんの飼育のな
やみや、しつけのアドバイスなどでもできるようなトリマーさんにな
りたいです。飼い主さんによるこんでもらえたら、私もうれしくな
るので感謝されるような人になれるように、これからがんばりたい
と思っています。

佳作

プログラマーになるために

岐阜県恵那市立長島小学校五年

小栗 凱成
おぐり かいせい

ぼくの、しょう来の夢はプログラマーになることです。理由は、

ぼくはゲームが好きでいつか有名なゲームの開発に、関わってみた
いなと思ったから、プログラマーになることをしょう来の夢にしま
した。

そのために、ぼくは今からでもできることを考えてみました。一
つ目は、算数をできるようにすることです。理由は、プログラマー
は計算ができないと、なるのはむずかしいかなと思ったからです。

二つ目は、小さなころから、スクラッチなどで、ゲームを作っ
てみるのいいと思います。理由は、小さなころから、ゲームを作っ
てみて、大人になっても使える力をつけることができるかと思っ
たからです。

三つ目は、考える力をつけることです。理由は、昔のゲームはと
ても少ない容量で遊べたけど、最近のゲームは昔よりも進化して
いるけど、そのぶん容量を昔よりもとるので、考える力をつけて、少
ない容量でより楽しいゲームを作りたいです。

四つ目は、英語を覚えたいです。理由は、ゲームなどを作るとき
でも、英語は必要だと思ったし他の仕事につきたいと思っても英語
は使うと思ったから、英語を覚えたいなと思いました。

五つ目は、コミュニケーション能力をつけることです。理由は、
ゲームはたくさんの方が協力して作っているから、まずおもしろい
ゲームを作るためには、コミュニケーション能力を身につければい
いと思います。

六つ目は、やりぬく力をつけることです。理由は、ゲームは作る
のがとても大変なのでどんな事でも、最後までやりぬく力をつける

のがよいと思いました。

ぼくは、このような力をつけてから、しょう来プログラマーになって、ぼくが大好きなポケモンやマリオ、ドラクエ、マイクラに負けないぐらいのとても有名なゲームをいつか作りたいです。

佳作

絵本作家

岐阜県恵那市立山岡小学校六年

近藤 里虹^{こんどう りこ}

私の夢は、絵本作家になって、世界や日本のためになる大切なことをたくさんの人に伝えることです。例えば、ゴミのポイ捨てなどによる環境問題が起きているときに、いつまでも続かないように、絵本をつくり、未来の大人である子どもたちに伝える、ということが、私の夢です。

「絵本作家」という夢をもったきっかけは二つあります。一つ目は、自分の絵をほめてくれる友達がいることです。アニメなどのイラストを手本を見てかいたとき、まだかいているとちゅうなのに、「上手だね」と友達はほめてくれるので、自分の絵に自信がついてくるのです。二つ目は、いま世界や日本ではたくさんさんの環境問題が起きていることです。いま日本や世界では、二十五も環境問題が起きています。「環境問題」とは、人間の活動によって地球に起こるマイナスの環境変化のことなので、それを少しでも減らしたいです。

でも、自分の弱い部分が一つあります。それは、手本を見てえが

かないと下手になってしまふところなんです。いつも私は、アニメやゲームなどのイラストを手本を見ながら絵をかいています。友達は「上手だね」と言ってくれているけれど、それは手本を見ながらえがいているだけなので、上手とは言いきれないと、わたしは思います。だから、子どもが喜ぶようなかわいい絵をえがけるように、最初は手本を見ながらでいいから、少しずつレベルアップして挑戦していきたいです。

それと、夢をかなえるためにこれから努力していきたいことが一つあります。それは、環境問題について調べることです。わたしが絵本作家になっているころには環境問題は減っていると思います。でも、なくなつてはいないと思うので、将来どんな環境問題が起くるか調べていきたいです。

佳作

前向きにがんばり通訳に！

岐阜県恵那市立岩田小学校五年

西尾 彩希^{にしお さいき}

私の将来の夢は、外国人の人を上手に案内する通訳する人になることです。通訳とは、互いに言語が異なつて話が通じない人々の間に立つて、双方の言うことを翻訳して話を通じさせることです。私が通訳する人になりたいと思ったまでの話を紹介します。

わたしのゆめ

岐阜県恵那市立長島小学校一年

山本 笑輪やまもと えわ

最初私には夢がありませんでした。でもある日京都に行った時に、外国人の人が道がわからずまよっているところを、大人の人が英語で道を教えてあげていました。だからすごいなと思いました。それから私は通訳という仕事を知りました。内容を聞いてとても素晴らしい仕事だなと思います。でも通訳は、英語がしゃべれないといけないし、仕事とはいえお客さんについていけないといけないしそれで体力を使うから大変だと思いました。けれど観光客の人たちが通訳をたよっているのを思うと、がんばらないといけないと思いました。また通訳する側にとっては、理解力、表現力、コミュニケーション力、判断力が求められます。理解力、表現力は、外国語と同じだけ日本語力が求められます。コミュニケーション力、判断力は、通訳が必要な会議やイベントでは、「予想外のトラブル」が発生することもあります。それに情報収集力、調査力では通訳パフォーマンスの質を保つために必須な基本的なスキルです。

夢の実現のためにこれからは、外国語大学に通い、通訳の基本的なことなどをたくさん学びたいと思います。たくさん日本語や外国語を学んでいれば、むずかしい言葉でも相手に分かりやすく翻訳できと思うからです。でも私は通訳にとって一番大事なのは、観光客の人たちの手助けになるという気持ちなんじゃないかと思います。そのために今できることは、何事もあきらめずチャレンジし、前向きにがんばることです。前向きにがんばれば通訳になれると信じています。これからも勉強、外国語をがんばりたいです。

「これおいしいね」わたしがいつかなえたいゆめで一ばんにたいせつなことは、うれしいことです。わたしのなまえのいみであるえがおのわをひろげるということにぴったりのしごとです。それは、「ぱんや」である。ぱんやとはぱんをやっておきやくさんにぱんをうるしごとです。なぜぱんやになろうとおもったかというところかあさんがぱんをつくっていたときにじぶんもつくってみたいとおもいつくところがひかれました。でもいまじぶんは、ぱんはつくれません。なぜかというはまだぱんのつくりかたを知らないからです。おぼえるためには、ぱんのつくりかたのかいてあるほんをよむことやまずは、おかあさんがりょうりをつくっているところをよくみたりしてつくりかたをおぼえたいです。また、つくったあとはあとかたづけをしなくてはいけないのでいまのうちからあとかたづけのやりかたをおぼえたいです。ぱんやになったらたとえば、ふらんすぱんやめろんぱん、ほかにいろいろなぱんをつくってみたいです。またじぶんであたらしいぱんをつくってみたいです。いまじぶんは、ぱんをつくるために、できていることはばんきょうです。とくにさんすうではざいりょうのおもさやおかねのけいさんもまだできなけれどこれからもっとうえのがくねんになっていくのでいろいろ

ろいえやがっこういがいのところでたくさんおべんきょうをしてパンやになりたいです。またおかねのけいさんができないとこまるのでしっかりがっこうのせんせいのはなしをきいてべんきょうができるようになりたいです。もしわたしがぱんやになったらこだわりたいところはざいりようのさんちややきかげん、おいしくなるようにくふうしてたべてもらえるようにしたいです。わたしのぱんをたべたひとはおいしかったねといってだんだんえがおのわがひろがっていくせかい一のぱんやさんになりたいです。

おうめい 嚶鳴協議会と嚶鳴協議会賞

嚶鳴協議会は、ふるさとの先人をまちづくり、人づくり、心そだてに活かしている自治体が、情報交換や交流、連携を通してよりよき地域づくりを探るための協議会です。「嚶鳴」とは、中国最古の詩集『詩経』に出てくる言葉で、鳥が仲間を求めて鳴き交うという意味。転じて、仲間が集まり切磋琢磨しながら学び合い教え合うことを意味します。名君・上杉鷹山の師として名高い愛知県東海市出身の儒学者・細井平洲が江戸に開いた私塾を「嚶鳴館」と名づけたことでも有名です。

加盟自治体が持ち回りで毎年開催する「嚶鳴フォーラム」を中心に、市町長会議、教育長会議、行政職員や市民の交流事業等活発な活動を行なっています。恵那市では、平成二十一（二〇〇九）年と令和四年（二〇二二）に開始しました。また、嚶鳴協議会加盟自治体が行なう公募事業等の中で協議会の趣旨に添った事業に対して「嚶鳴協議会賞」を授与しています。

【嚶鳴協議会加盟自治体（令和五年度）】恵那市 大野町 沖縄市 小田原市 釜石市 木曽町 高鍋町 多
久市 日田市 東海市 養父市 米沢市

下田歌子先生のこと

作家・下田歌子賞選考委員長 童門 冬二 どうもん ふゆじ



下田歌子先生は安政元（一八五四）年八

月八日に、現在の岐阜県恵那市岩村町に生まれました。生家は藩（松平家）の儒者で

した。父は平尾録蔵、母は房、そして歌子

先生は鉦といいました。明治三（一八七〇）

年に父録蔵が、明治新政府の神祇官宣教師に任ぜられて上京し、翌春、後を追って

鉦が上京。引き続き一家をあげて東京に出

ました。宮内省の御用掛・八田知紀に和歌

の教えを受けていた歌子先生は、明治五

（一八七二）年十月、推挙されて宮中に出

仕し、女官として皇后陛下（後の昭憲皇太

后）に仕えます。下田先生の和歌の才能を

愛でられた皇后陛下が、「これからは歌子

となるように」と仰せられ、鉦の名を改

めました。才女の名が高く、明治の紫式部

などと呼ぶ人もいました。その後下田猛雄

と結婚し、明治十二（一八七九）年十一月

には宮中を辞しましたが、周囲から望まれ

て自宅に「桃天学校」を開設し、政府高官

や華族の子女の教育に当たりました。

夫の死後、再び宮内省に入り、華族女学

校（学習院）が開校されると教授になりました。

この間に、欧米の女子教育を視察す

るためにヨーロッパに渡っています。

明治三十一（一八九八）年に「帝国婦人

協会」を結成、その付属として、翌年「実

践女学校」（実践女子大学の淵源）を開設

しました。そして清国（このころの中国の

国名）からの女子留学生を、積極的につけ

いれました。

桃天学校時代には、明治五（一八七二）

年に日本からアメリカに留学した五人の女

子留学生のうち最年少（当時八歳）の津田

梅子が明治十五（一八八二）年に帰国して

きたので、英語の教授陣に加えています。

歌子先生は、梅子に英語の指導を頼むかわ

りに、梅子に国語と習字を教えました。少

女時代をアメリカですごした梅子は、英語

は得意でしたが日本語が十分ではなかった

のです。穴をワナ、柳をウナギといった

たそうです。とくに手紙の中で使う「候」

という字の意味と用字法がわからなくて、

何度も歌子先生にしつこく質問したそうで

す。歌子先生の説明を英語でノートをとっ

たといわれています。

歌子先生のめざしたことは、日本におけ

る女性の地位向上です。そのための女性の

教養の高まりです。しかもそのことを「日

本女性のよさを失わずに実行する」という

しとやかさとやさしさ、温かさを大切にす

る、というものでした。その志はいまも香

を失わずに、実践女子学園やふるさと恵那

市だけでなく、さまざまなところで引きつが

れています。

第
21
回
下
田
歌
子
賞
受
賞
作
品

中高生の部

「夢」の歌

最優秀賞

憧れて 教師になると 決めた時
待っているねと 恩師の言葉 大友結衣

憧れて 教師になると 決めた時
待っているねと 恩師の言葉

東京都・白梅学園高等学校一年 大友結衣

優秀賞

自分だけ 咲かぬ花だと 焦らずに
信じて進め 寄り道しつつも 山岡咲葉

自分だけ 咲かぬ花だと 焦らずに
信じて進め 寄り道しつつも

東京都・白梅学園高等学校一年 山岡咲葉

入 選

ぼくの夢 人を助ける 消防士
父にあこがれ 九年間 安藤摩斗生詠



ぼくの夢 人を助ける 消防士
父にあこがれ 九年間

岐阜県恵那市立申原中学校一年 安藤 摩斗生

入 選

やさしくて 笑顔あふれる 保育士を
短冊にたくし 努力続ける 額額わか



やさしくて 笑顔あふれる 保育士を
短冊にたくし 努力続ける

岐阜県恵那市立恵那北中学校一年 額額 わか

入 選

言の葉を 清く育てる 我が母の
背を見て育つ 夢は詩人 小嶋涼香詠



言の葉を 清く育てる 我が母の
背を見て育つ 夢は詩人

神奈川県立川和高等学校三年 小嶋 涼香

夢

東京都・実践女子学園中学校 二年 桶谷 知礼おけだち ちあき

私の将来の夢は、教師になることです。なぜなら、誰かの役に立つことができる仕事だと思うからです。

私が小学校の時にお世話になった英語の先生が、「夢を叶えて教師になったけれど、これからも教師としてできる限り勉強を続けたい」とおっしゃっていたのが、とても印象的でした。

例えば、アメリカでは、「暑さ」といっても「溶けるような暑さ」や「焼けるような暑さ」など、日本語と同じようにさまざまな言い回しがあります。また、時代とともに増えていく言葉や表現を調べ「生きた英語」を使うことができるように、そして生徒に教えられるようにと、日々努力されているそうです。先生ご自身のためだけでなく、生徒のために全力で取り組まれている先生が、とても心強く、かつこよく見えました。

先生という職業への憧れは、実践女子学園中学校の先生方との出会いでさらに強くなり、いつしか目標となりました。

そして、私が誰かの役に立ちたいと思うことができた、もう一つのきっかけとなったのは、この作文を書くにあたり、父の話を聞いたことです。私は、父に仕事について初めて聞きました。父はテレビ番組のプロデューサーをしています。プロデューサーの仕事は主

に、番組の企画立案をすることや、収録した番組を放送できる形に整えること、さらに、要員・物品・予算など番組制作に必要な事柄をすべて管理することです。番組づくりには大勢の人が関わっています。すべての人が自分の持ち場で能力を最大に発揮し、働きやすい職場環境を作ることに苦労しているそうです。また、番組は不特定多数の人が視聴するので、「内容に誤りがなければ」「人を傷つけないか」「誰かの権利を侵害していないか」「言葉の表現が正しいか」などに気を付けるようにしています。仕事がどんなに大変なものになっても、番組視聴者からの好意的な反応が出るときは達成感が忘れられないと言っていました。誰かの役に立つことができたかもしれない、その奢らず、ささやかな思いが、父の大事にしていることなのだと私は感じました。大人になって、私も誰かの役に立っているかもしれないと実感することが出来れば良いなと思いました。

教師になるには、教員養成課程をもつ短大や大学などで学び、教育免許状を取得することが必須だと知りました。何事においても必要なのは、身の回りのことだけでなく、社会の動きに関心を持つことだと思いました。好奇心を持って、興味があることを深く掘り下げて理解することです。学業に前向きに取り組むことは、夢を叶えるための第一歩であり、基礎になるものだと感じました。

今日も私は学校へ行く

岐阜県恵那市立岩田中学校三年

河合 かわい 里央羅 りおら

中学二年生の春、私の身に起立性調節障害という自律神経の働きが悪くなり、起立時に身体や脳への血流が低下する病気だということが分かった。

起立性になってから私の生活は大きく変わってしまった。朝、うまく血圧を上げることができないため、起き上がれなかったり、ひどい日はお昼までベッドで過ごしたりする。そのため学校は遅刻や欠席がほとんどだった。私が遅刻や欠席をすればするほど、みんなとの勉強の差は広がっていった。それだけではなく友達の話についていけないことも多くなった。「勉強勉強勉強」そんな言葉で頭がいっぱいだった。勉強も思うようにできない。朝も起きれない。友達に気をつかわせてしまう。そんな自分がどうしても好きになれなくて、「病気なんだからしょうがない」と言われてもどこか自分の病気に甘えてしまっているんじゃないかと毎日毎日自分を責めた。それがストレスになり、症状はさらにひどくなってしまった。そんな時に手を差し伸べてくれたのが担任の先生だった。その先生は私が苦しいと思っている時、必ず気づいて声をかけてくれた。たくさん相談にも乗ってくれた。毎日のように「大丈夫？無理しちゃダメだよ」と言ってくれた。その言葉がきっかけで私は自分の病気を受

け入れ、今自分ができることをやろうと思えるようになった。症状にも慣れてきて学校も楽しくなった夏、私は体育祭の団リーダーになった。団リーダーはとても忙しかった。その上、夏の暑さで体調がすぐれない日もあった。でも、先生が団リーダーの仲間に事情を説明してくれて、先生にも仲間にも支えられて無事体育祭を成功させることができた。自分に自信がついたし、仲間に頼めることは恥ずかしいことじゃないと気づくことができた。そして終了式の日、先生にどうしてもありがとうを伝えたくて、クラスのみんなが「さようなら」と帰る中、私は先生の元へ行った。笑顔で今までで一番のありがとうを伝えようとした時、気づけば私は泣いていた。ぐちゃぐちゃな顔で言った「ありがとう」は心の底から出たものだった。

先生から学んだこと、それは自分を認めることの大切さ、そして思いやりの大切さだ。誰かの気持ちを一瞬でも考えて相手に寄りそうことができればきっと多くの人の涙が笑顔に変わるだろう。私は先生にしてもらったことを忘れず、自分も誰かの支えとなる存在になりたい。そしていつか先生に笑顔で「あの時はありがとうございました」と言えるように、先生の優しさを日々の活力に変えて今日も私は学校へ行く。

みんなが使いやすいように

東京都・実践女子学園中学校 二年

古林 実桜
ふるはじ みお

私の夢は、みんなが便利で使いやすい文房具を開発することです。なぜ文房具の開発なのかというと、私が小学生の頃、大きな文房具専門店に行きました。その文房具専門店には、さまざまな種類の文房具がありました。私が、今使っている文房具よりも、世の中にはこんなにもたくさんの種類の文房具があることを初めて知りました。たくさんさんの文房具がある中で、私はシャープペンシルの芯がすぐに折れてしまうことに對して、どうにかならないのかなと思っていました。そのお店には、芯が折れにくい機能が付いているシャープペンシルがあり、買ってもらいました。使ってみると、本当に芯が折れにくく感動しました。その経験から、便利な機能が付いている文房具を開発してみたいと思ったことがきっかけです。

さらに、様々な文房具を使っているうちに、シャープペンシルやボールペン、マーカーペンなどがどのようにできているのか知りたくなりました。図書館で、『文房具の解剖図鑑』や毎年発行されている『文房具屋さん大賞』、雑誌に載っている文房具の特集などの、文房具の本を見つけると必ず最新の文房具や仕組みなどを調べています。

ある日、小学校の授業でユニバーサルデザインの製品を探すとい

う授業がありました。その時に、普段私たちが何気なく使っているものが、ユニバーサルデザインとして紹介されている本を借りました。その中に、小さな子や高齢者でも使いやすいホチキスや画びょう、はさみなどが載っていました。小さな子は、画びょうの針やホチキスの芯が出ていたら危ないし、針を抜くの力がある画びょうや止めるときに力があるホチキスは力の弱い高齢者にとっては、使いにくいことが分かりました。それを見て、私たちが普段当たり前に使っているホチキスや画びょうやはさみも小さい子供や高齢者には、使いにくいのだと気がつきました。

そこで私は、普段使っている文房具を思い出してみました。シャープペンシルやボールペン、鉛筆などの筆記用具は文字を書くのにとっても重要で、毎日使います。その筆記用具を力が弱くて使えなかったり、持ちにくくて使えなかったりすると困ります。その本のほかにも、なにかほかのユニバーサルデザインの製品はないのかと、インターネットを使って探したところ私が普段から使っている製品もユニバーサルデザインであることが分かり、とても驚きました。

みんなが便利で使いやすい文房具を開発するためには、文房具が使えないで困っている社会的弱者のことを知って、その人達が文房具についてどのような点で困っているかを日頃から考えることが、とても大切だと思いました。このように、私は将来、老若男女問わずすべての人が便利で使いやすい文房具を開発したいです。

祖父からの宿題と私の夢

岐阜県・多治見西高等学校一年 前川^{まえがわ}菜々子^{ななこ}

私は大好きな祖父の影響で、小学生の頃からずっと心に温めてきた夢がある。身勝手な人間のために、捨てられたり虐待されたりして保護された犬や猫たちの命を救う為のお手伝いがしたい。可愛いから、自分の寂しさを紛らわす為などのきっかけでペットショップなどで命を購入し、大きくなってしまったから、引越すから、吠えるから、病気になるって世話ができないから、など人間側の無責任な理由から、言葉で助けを求めることのできない犬や猫たちの大切な命が危ぶまれる事態が日本中で起こっている。運よく保護された犬猫はまだいい方だろう。野犬となり群れを作って生きていくしかなかったり、ストレスの捌け口にされて虐待されたり、命を奪われたりする悲しい事例も多々ある。

私が小学生の時に、犬を飼いたいと両親に言うのと、それを知った祖父が名古屋市にある「動物愛護センター」に連れて行ってくれた。ちょうどその日は保護された犬や猫たちを、新しく家族として迎え入れたいと面会にやってきた人達でとても賑わっていた。

しかし建物の中に入るとある一角に二十四ぐらいの犬たちが入れられていて、近づくと一緒にこちらを見てすがるように鳴き始めた。それはまるで自分の飼い主を待ちわびるかのようには思えた。私は思

わず祖父の腕をぎゅっと掴んだ。小学生の私には衝撃的だった。固まって言葉も出ない私に祖父が静かに言った。

「犬や猫を飼うということは、命を預かるということだよ。仔犬だっていつかは歳をとるし、病気をするかもしれん。最後まで責任を持って世話をすることだ」

私は祖父の腕を掴んだまま、うんうんと頷いた。涙がぼろぼろと出ていたのを覚えている。この日の経験から私は動物愛護センターにとっても興味を持つようになった。

小学五年生の夏休みに岐阜県美濃市にある動物愛護センターで行われた施設の見学と、「人と動物が共生する地域社会の実現」という講習を受けた。職員の方に殺処分の方や、保護された犬猫たちの今後や、小学生の自分が出来る行動や活動はどんな事があるか、など気になる事を質問し、それをレポートにして自由研究とし、発表することで学校のみんなにも知ってほしいと思った。

講習では、保護犬をセラピードッグとして育成したり、災害時に飼い主と一緒に避難する事を想定した避難準備の啓発、譲渡活動の流れなど、動物愛護センターの役割、仕事内容を詳しく知る事ができた。命を預かる、護る。これは決して中途半端な気持ちではできない。私のライフワークを見つけた、と確信した。動物愛護センターの職員となり、保護された犬猫の命を一匹でも多く救いたい。

夢を叶える為にはまず公務員になる必要がある。公務員になれたとしても必ずしも愛護センターへ配属されるとは限らない。でもたとえ遠回りしたとしても夢は諦めない。

世界の平和と安全を守るために

東京都・実践女子学園中学校一年 上山^{かみやま}理子^{りこ}

私は物心がつく前から、デイズニールランドにある「イツツアスモールワールド」のアトラクションが大好きでした。色々な国を旅しながら、たった数分間で世界を一周してきたような気持ちにさせてくれるからです。一番の感動は最後の場面です。それまでは国や大陸ごとに集められた人形たちがそれぞれの言語で歌を歌いますが、最後、目も肌も言語も違う世界中のお人形たちが、全員集合し、仲良く一緒に歌を歌って終わるのです。

地球には色々な国があるけれど、「世界はせまい、世界は同じ、世界はまるい、ただひとつ」の歌詞のように、私もみんなも同じ地球人なのだ、という感覚が小さい頃からずっとありました。

私の住んでいた地域は外国人がとても多く、小学校にも日本語が話せない友達や宗教上の問題で同じ給食を食べられない友達が転入してくることも多く、その度に先生がその子の国のことを詳しく説明してくれました。世界には色々な人がいて、日本のように平和ではない国があること、飢えて死んでいく子供たちがたくさんいること、女性というだけで自由に生きられない人がいること、私が当たり前だとおもっていたことが決して当たり前ではないことを知りました。ニュースや新聞で外国の色々な問題を目にするのと他人事には

思えず、どうしたらイツツアスモールワールドの最後の場面のよう
に世界中の子供たちが笑えるようになるのだろうと考えるようにな
りました。

ある日、学校で「国際連合の仕事」を学びました。国連の活動は、
私の頭の中にずっとあったイツツアスモールワールドの世界とな
がったのです。

国連職員は、紛争や人権、貧困、気候といった世界のさまざまな
問題を解決するために実際に問題が起こっている世界各地に赴任し
て、現地でその問題解決に取り組みます。全世界の平和と安全を守
ること、各国の間に友好関係を築くこと、それを達成するために世
界各国が話し合いの場となること、それが国連です。国連で働くた
めには、異文化を理解して順応し、多国籍の仲間と協力し合える能
力が必要です。誰とでも仲良くなれ、どこでも寝られて食べられる
タフな心と体がないとグローバルに活躍できないと聞きました。そ
して当然、英語やフランス語くらいは使えるようにしなければなら
ず、中国語、スペイン語などの国連の公用語といわれる言語も話せ
た方が良いとも知りました。

いつか世界にはばたいて活躍できるグローバルな女性になりたい
と強く思い、早速、私は英語の勉強を始めました。海外へ行った経
験がないので、中高生の間に留学を経験し、できる限り異文化に多
く触れたいと思います。語学だけではなく、今世界で起きているこ
とを正確に理解できる視野の広い人になれるよう、日々の学習を怠
らず、目の前にあることを一生懸命取り組んでいきたいです。行っ

たことのない地球のどこかで、少しでも世界の平和の役に立てられるようになる日を夢見て頑張りたいです。

佳作

長生きすることで

東京都・広尾学園高等学校二年 北嶋 詢きたしま じゆん

「私の夢は、長生きすることです」

人に夢を聞かれてこんなふうに答えるときみんな笑います。周りの人たちは起業したい、有名な会社に就職してお金を稼ぎたい、料理人になりたい、経済を学びたい、目的がはっきりした夢を持っています。私も小学生の時は言語に強い興味があり通訳を志していました。色々な国の言葉を話せることで世界中の人々と友達になることができたらしかなあと思っていました。中学受験を経たことで、公立の小学校とは違いみんなが目的を持って中学校に入学してきたことで私も触発され夢について現実的に向き合い始めました。それでも言語への興味は尽きずに時間があれば英語、フランス語を筆頭に様々な言葉を学びました。流暢に話せるのはまだ英語のみですが。中学三年生の冬、ウクライナとロシアの戦争が始まりました。私は戦争という単語を聞くと第二次世界大戦のことを思い浮かべます。小学校の時に歴史で習い、大きな衝撃を受けたからです。戦死したウクライナの兵士の家族が日本のテレビのインタビュに

涙を流しながら答えている姿を見て、今まで文字と白黒の画像でしか知らなかった戦争で、本当に人が亡くなり、それによって悲しんでいる人がいることを実感し、過去のこととして習っていた戦争というものが急に身近に感じられた出来事でした。それと同時に戦争で扱われる命の重さについて疑問を抱くようになりました。

毎日ニュースを見ていると一日で何人もの人が命を落としていることがわかります。事故によって、事件によって、自殺によって。自分にとっては知らない人でも、被害者の家族にとってはかけがえない大切な人です。そのようなニュースは遺族の方や亡くなった方の友人のインタビュ記事も一緒に載っていることが多く、そこには「まだまだこれからだったのに」、「明るい家庭だった」、「周りから好かれていた」と言ったようなことがよく書かれています。一人が死ぬことによって、周りの人の人生まで狂っていきます。

あたりまえであると思っていた日常が突然壊れることによって人は命の重みを初めて理解します。「あの時、こうしておけばよかった」「諦めずに続けていればよかった」と後悔したところで時間を巻き戻すことはできないのはみんな知っています。あるサイトで、人は死ぬ時に走馬灯を見ると同時に今まで挑戦してこなかったこと、諦めていた夢を思い出し、今までの自分の行動を悔やむと書いてあるのを見かけました。

私は死ぬ間際に後悔の一つも残したくないので、健康的に長生きをして、やってみたくと思ったことにはすぐに諦めず、まずは挑戦します。長く生きることによって自分が試してみたいことに挑戦できる回

数が増えるので、私の夢は必然的に長く生きることになります。夢

をもう少し具体的にいうのなら「私の夢は、自分の人生に後悔しないように色々なことに挑戦する時間を確保する必要があるので、長生きすることです」。

佳作

地域の役に立てるように

岐阜県恵那市立恵那北中学校一年 瀨瀬 璃愛美こうけつ りあみ

皆さんの今持っている夢はありますか？

私の今持っている将来の夢は、教師になるという夢です。小学校の頃までは、学校の先生になりたいというざっくりとした夢しか持っていませんでした。でも、中学生になってからは、教師になるだけではなく、地域のためにも色々な活動をしたと思うようになりました。その理由がはっきりした出来事があります。

その出来事は、小学校六年の時に、地域の人のために動画や広報を作ったことが、大きな出来事です。動画や広報を作って、地域の魅力や地域の人や他の地域の人に発信するという、プロジェクトで、クラスみんなで作ってきました。クラスみんなで作った、動画を地域のホームページに上げた時、それを見てくださった地域の人に会った時に、

「あの動画すごいね」

と言ってもらえてとても嬉しかったです。広報もクラスの人々で作ったので、広報をコミュニティセンターに行ってみてもらった時に、

「上手にできているね。すごい」

と言ってもらえました。そこで、人のために色々なことをするのは、とても良いことだし、相手はもちろんだけど、自分も嬉しくなるということがつきました。そこから、地域のためにも色々な活動をしたいという思いが出てきました。

今、私が取り組んでいることは、地域の行事になるべく参加することです。色々な行事に参加すると、地域の行事がいつまでも残ると思うので、参加するようにしています。でも、できる限り大人になる前までは全ての行事に参加したいと思っています。

それから、飯地の歌舞伎にも参加することを頑張っています。歌舞伎は、四年ぶりに開催されたので、開催されない時があってもいつまでも残るように参加しています。自分がやっていない行事も何年経っても、残ってくれることを願っています。歌舞伎は大変だけど、自分にも歌舞伎を残したいという思いがあるし、周りの大人の人にもその思いがあってサポートをしてもらったので、大変だけど頑張りました。取り組んでいることも沢山あるけど、もっと取り組みたいこともあります。

もっと取り組みたいことは、地域の人のためや他の地域の人のために、地域の一番偉い方に頼んで友達と自分が、ガイドでツアーなどを開催してみたいと思っています。地域の人や他の地域の人たち

が一緒になってツアーが出来たら良いなと思っています。

そして、他の地域の人に色々な事を知ってもらって、他の地域の人にも発信してもらいたいと思いました。

地域のために今から色々な活動に少しずつ取り組んで、教師になったら地域に恩返しができるようにしたいと思いました。

夢が変わることはあるかもしれないけど、今の夢に向かって全力でやり切りたいです。

佳作

私の居場所

大阪府立水都国際高等学校一年 塩尻晏史^{しおじりあ}采

「あなたは家ではうるさいのに外では凄い静かだね」よく家族から言われた言葉。人見知りで人と話すのが怖かった私は、いつも外では親の後ろに隠れ、挨拶も、誰かと目を合わせることも苦手だった。必死に勇気を出してお辞儀をした時も気づかれず、「無視された」と言われたり、無愛想な子供だと思われることも多かっただろう。それでも、私は人と関わることが嫌いではなかった。話すことも本当は好きだった。だから勇気を出して、沢山挨拶の練習をした。気づかれることは少なかったが、幼いながら頑張った。そこまで必死に頑張れたのは、姉二人の影響も大きい。二人は可愛くて明るくて、いつも周りに友達が居て、私にとって自慢のカッコよくて優し

い姉だった。その二人を見てきたからだろう。私は懂れていた。歌も上手くてリレーではいつもアンカーを走る姉たちと、歌は普通でリレーはいつもビリの私。何か、二人より秀でたものが欲しかったのかもしれない。とにかく姉を見て、私は自分を変えたいと頑張れたのだ。

ある時、小学五年生の時だ。私に転機が訪れた。それは学芸会の役決めをしていた時、当時の担任が私をこっそり呼び出した。そして言われた。「このシーンの主役をやって欲しい。これは君にしか出来ないと思うから」思わぬ提案だった。まさか主役を指名されるなんて、しかも凄く難しい重要なシーン。ついいつもの悪い癖が出た、私に出来るのか、と。でもすぐに先生の言葉を思い出して踏みとどまる。「君にしか出来ない」初めて人に言われた言葉だ。今私は必要とされている。私にとって、これほどまでに嬉しい言葉はない。「是非、やらせて下さい。やりたいです！」緊張して上手く言えていたかは分からない。でも、初めて先生に、心からの自分の気持ちと言葉に出来た瞬間だった。そうして劇の練習が始まる。嫌になることなんて一つも無くて、ただただ一日中、夜も眠れないほど劇の事を考え続けた。挫折しそうな時も、先生から貰った言葉を胸に頑張った。学芸会当日。不思議と緊張はない。練習通り台詞を言う。拍手と体育館に響くざわめき。無事に、舞台は幕を下ろした。その後、皆は私を褒めてくれた。「上手かった」とか、聞き耳を立てていると「あの役の子誰だったの?」とか。そういう言葉が私は嬉しくて、ただ、もっと私なら出来たのという悔しさもあって、気づいた。

演技に対する私の情熱に。そして、お芝居の時は恐れることなく自分を出せていたことに。舞台は、私を私で居させてくれる場所。そして、私を輝かせてくれる場所。ここでなら、私は誰かに認められ、人を動かすことが出来るのだ。その日の夜、私は決めた。私の夢は、そんな舞台で自分を表現し続けること。そしていつか、私のような誰かに、勇気を届けたい。

佳作

誰かの生活の一部に

東京都・実践女子学園中学校一年 志茂 采実^{しちも さいみ}

皆さんの日々の生活の中で、当たり前前の存在はありますか。周りにあって当たり前前の施設やサービスは何でしょうか。日々の安全を守る警察官や消防士、病院で働く人々、水道や電気などのインフラを支える人々。様々な人達のおかげで、私たちの生活の一部となるエッセンシャルワーカーと呼ばれる仕事に就きたいと思っています。

生活の一部となっている仕事だからこそ、普段は当たり前前の存在であり話題にあがることもないと思います。しかし、私は小さな頃から近くで存在を見てきました。私の両親は二人共エッセンシャルワーカーです。私の小さい頃から、お盆休みも、お正月休みもありません。人々の生活を支えるということは、様々な場面で、自分

の生活を犠牲にすることでもあると思っています。

二〇一一年三月十一日、東北で東日本大震災がありました。私は一才にもなっていないのであまり記憶にはないのですが、父は警察官として、災害が起こった次の日から被災地支援に向かいました。まだ予震も続く中、当時は福島県の原子力発電所の放射能の危険も騒がれている中、家族を残していく不安はどれほどだったかと思います。十年以上経った今でも、震災の爪跡は残っていますが、父のような思いを抱えつつも被災地に向き、それぞれの仕事を全うした人達の手によって、復興は支えられてきたのだと思います。

近年のコロナ禍において、エッセンシャルワーカーがとり上げられることが多くなり、その大変さにも注目が集まっています。特に、医療従事者はこの感染が始まってから、厳しい生活を強いられていました。私の母は看護師です。発熱外来など、感染者と近い距離で接することもある、危険な業務を行っています。まだコロナの全貌が分からなかった三年前、私は小学生でしたが、学校を自主的に休んでいる時期がありました。母が看護師ゆえに、いじめを受けることを防ぐためでした。皆のために働いている人々にさえ、心ない言葉をぶつける人々もたまにいたのです。

社会には、私たちが普段何気なく使っている公共交通機関や病院、サービスなど、「当たり前」を支えている人々がたくさんいます。その人々は、自分の時間が思うようにとれないことも、家族を優先できないことも、きつとたくさんあります。先程述べたように、人々にとって当たり前前の存在となっているからこそ、多くを求めら

れ、心ない言葉をぶつけられることもあるでしょう。ですが、家族を含めた皆の「当たり前前の生活」を守るために、日々働いています。子供にとっては、もちろん寂しかったこともたくさんあります。ですが、両親の働きが人々の生活を支えていると思うと、今ではとても誇らしく思えるのです。

私が両親を誇りに思っているように、私も誰かの「誇れる人」、誰かを「支える人」になりたい。そう思っています。



表彰式オープニング：実践女子学園中学校高等学校吹奏楽部の演奏

原点は「自分・家族・家庭」

第九回下田歌子賞選考評より

作家・下田歌子賞選考委員長 童門冬二 どうもん ふゆじ

今の日本の国の姿を見るとき、私は、「修身・齐家・治国・平天下」という言葉が思い出されてなりません。これは、中国の古代に生まれた思想で、日本では江戸時代の指針の一つでした。

「修身」というのは、自分の身を修めることです。

「齐家」というのは、家を整えるということです。

「治国」というのは、国を治めるということですが、江戸時代に使われた言葉なので、藩、すなわち日本の大名家の行政区域、今でいえば地方自治体を言います。

そして、「平天下」というのは、日本全体を平和に運営していく、経営していくということです。

この言葉は、国の平和も地域の発展も家の整えも、そのスタートは、「修身」、すなわち、一人ひとりが身を修めることにあり、とっているわけです。そしてその身を

修めるための手がかり、足がかりとして格好の材料になるのが先人の足跡や教えを学ぶことです。

次に、「齐家」ということを考えてみると、下田歌子先生は、

「家庭は最良の学校である」

という言葉を残しています。

個人が集まって家庭をつくるわけですから、その家族の一人ひとりが、互いに学びあい、教えあう、すなわち、一人ひとりの修身を通して家族の一員としてなにかをし、かつかりとつかんだものを、今度は、家族の中でフィードバックしていくことにより、初めて「齐家」が実現するのだということです。

同じことを、実業家の渋沢栄一しぶさわえいいちさんは、「家庭は小さな政府である」と言っておられます。

家族の一人ひとりが議員だということです。一人ひとりが良識を持ち、問題点に対

する理解力と同時に、それを解決するための自分なりの意見を持っていることが大事だ、それを育ててくれるのが家庭だということでしょう。

そのような「修身」「齐家」という営みが、「治国」「平天下」へと広がっていくのです。

ところで、江戸時代の名君・米沢藩九代藩主上杉鷹山の師として有名な儒学者で教育者の細井平洲ほそいへいしゅうさんは、

「文章というものは、自分が感動したことを他人に伝えることだ」

とおっしゃっています。小学生の部・中高生の部から一般の部まで、受賞された皆さんは、お一人おひとりが持つておられる感動をきちんと整理され、私たちに伝えてくれています。

そして、その一つひとつの作品が表彰式での朗読や受賞作品集といった場で、出会い、一つに溶け合っています。

第
21
回
下
田
歌
子
賞
受
賞
作
品

一般の部

「夢」の歌

最優秀賞

孫の背を 流せば泡の 湧き出でて
シャボン玉飛ぶ 夢の数だけ

千葉県市川市 小田中 準一
おだ なかじゅんいち

優秀賞

笑顔さく こども食堂 ひらく夢
明日へと繋ぐ 生きる力を

岐阜県恵那市 鵜澤 忍
うさざわしのぶ

入 選

雑踏に 生歌叫ぶ 若き娘よ
かじかむ指で 夢を爪弾く

徳島県小松島市 谷本良裕

入 選

綿毛にも 夢があるから 風に乗る
どこであろうと 咲いてみせると

愛知県稲沢市 村上亜祐美

入 選

使いこんだ グローブ手にし 継続は
力なりだと 君から学ぶ

岐阜県恵那市 山村はつみ

夢見た夢

大阪府寝屋川市 本田 美徳ほんだ よしのり

どうしても、この人に見せてあげたい夢。私には強くそう思い続けたことがある。あれは今から十二年も前のことだった。

現在では「あの三・一一」といつても分からない世代さえ増えた東日本大震災。私は発災地の宮城県に、遠く関西から派遣された警察官の一人だった。まだ激しい余震が続く東北の地に、仲間と共にバスで何十時間もひた走り、車内から私達が見たものは怪物のような黒い瓦礫の山と倒壊した家屋ばかりで、到着した現地では「既に生存者は絶望的」と告げられ、地獄のような現場が待っていた。

やがて仮安置所として開放された地元の体育館にご遺体を搬送し、綿密な検視の後には行政機関が用意した棺に納棺することが私達の主任務となっていたが一番困難を極めたのは、安置所を訪ねて来られる遺族とご遺体との対面への立ち合いの任務だった。

遺族感情というのは人それぞれに違う。ご遺体を目の当たりにして我が子だ、我が親だと泣き崩れ、それでも発見されたことの事実には安堵される遺族もいれば、我が子のご遺体を確認し、所持品と人相が一致したとしても、「違う！これはうちの子じゃないっ！うちの子は絶対にどこかで生きてるんだっ！」と、頑なに認めない親御さんもおられた。私達は地元の警察官らと共にそんな遺族の一人ひ

とりに寄り添い、また或る時は説得し、安置所で立ったままで行われる仮葬儀への立ち合いを行った。悲鳴、号泣、慟哭が渦巻く哀しみの極致での任務は胸が張り裂けそうになるのをひたすら堪えての辛い任務だったが遺族がご遺体をお迎えに来られてお帰りになられる際にいわれる「お世話様でした」という一言だけが僅かながら救いのように思えた。

私達の関西への帰任が近づいたある日、若い女性の仮葬儀が行われた。その女性は高校生で、安置所内でメイク係の人から丁寧なエンゼル・ケア、つまり顔に死後処理を施されていた。棺の中の彼女はほんのりと明るい紅色に染まり、とても綺麗だった。

娘さんと対面されたご両親と私は、ご両親が最初に安置所を訪ねて来られた時から顔馴染みになっていた。葬儀会社が手一杯でなかなか葬儀が決まらなかったが、お父さんは制服を着た娘さんの遺影を手にかけて「お世話様でした」と言われ、私達に向かって深々と頭を下げられた。

その時に一緒にいたお母さんが嗚咽しながら呟いた言葉が私の胸を締め付けた。

「何で……何で、夢に出て来てくれないの……」

貴女は学校の先生になるのが夢だったでしょう……お母さん、ずっと待っているよ……」

しゃがみ込むお母さんをお父さんが抱き抱え、お父さんも一緒に号泣された。

任務に徹しろ！と私は心の奥で叫んだ。どんなに厳しい任務に

も耐え、どんなに辛いことがあっても奥歯を噛みしめて泣くのを堪えるのが警察官だ。だから私は、立ち上がったご両親がまた私に頭を下げられた時、制帽を深く被り直して奥歯を強く噛みしめてから敬礼を返した。そうしなければきっと私はお二人に涙を見せていただろう。

お迎えの車に娘さんの棺を運び入れるのを手伝った時、やっと私からお母さんに声をかけることができた。

「いつか……夢でお会いできたらいいですね」

かける言葉も見つからないこの状況でたった一言、私からいえたのがこの言葉だった。

「ねえ。本当に。会いたいです。頭が良くて成績もいい子だったんですよ。夢で学校の先生になっててくれてたら」

ほんの少しだけが柔和な笑みを取り戻してくれたお母さんはそう私に返してくれた。

お父さんが抱いている遺影をもう一度見つめた。笑顔の娘さんは眼に力があって、利発そうなお嬢さんだった。お母さんがいわれた通り、立派な教師になっていただろう。

車内から頭を下げられたご両親に最後の敬礼をして見送った私達には、間もなく関西への帰任の時が近づいていた。

教師になる夢を持った娘が図らずも死出の旅路に着き、母親は一度でもいいから娘が夢見た教師となった夢を見てみたいと吐露された。任務だったとはいえ、哀切極まりないその言葉は私の胸に深く刻まれた。

優秀賞

私の応援歌

東京都杉並区 後藤 里奈

「私もまた弾いてみたいな……」

病室でテレビを見ていた姉がふと呟いた。見るとそこには、ストリートピアノで華麗な演奏をしている若い女性の姿が映っていた。姉の前向きな言葉に嬉しくなった私はすかさず、「それなら私が歌うからお姉ちゃん伴奏してよ」と頼んだ。姉は驚きと戸惑いの入り混じった表情を見せつつも、「いいリハビリになるかも」と言ってくれた。そしてこの日から、二人の挑戦は始まった。

私たち姉妹は幼い頃からピアノを習っていた。姉は毎年コンクールに出場して良い成績を修め、音楽大学卒業後はピアノの講師をす

夢とはこの世に生きていればこそその夢なのだろうか。志を果たせず儚くも命を散らした我が子にいつの日か夢の中で出逢い、命があった時に夢見た姿を見たいと想うこともまた夢なのだ。今、夢を実現させるために生きている特に若い人に向かって言いたい。命あればこそ夢を追いかけることができるのだと。
あれから十二年の歳月が流れた。ご両親はお元気にされているだろうか。そしてあのお母さんが教師となった娘さんと夢で再会されたことを信じずにはられない。

る傍ら演奏活動も行っていた。一方、そこまで才能のなかった私は中学生の時にピアノは諦め、代わりに声楽を習い始めた。音楽の道へ進むことは叶わなかったが、歌とピアノは趣味として続けていた。姉と二人で演奏することは、私の密かな夢だったのだ。

ところがある日突然、姉は不治の病を宣告された。全身の筋肉が徐々に衰え、最終的には歩くことも話すこともできず、寝たきりになってしまいう残酷な病気だ。当時は有効な薬や治療法もなく、私たち家族は絶望の淵に突き落とされた。だがいちばんショックだったのは姉だったろう。闘病には家族の理解と介護が必要だったが、すっかりふさが込んでしまった姉の前に、私はかける言葉を失った。それまで当たり前でできていたことが日に日にできなくなる恐怖と絶望感は、創造を絶するものだろう。病は姉の健康だけではなく、生きる希望や生きがいさえも奪っていくように見えた。

どうしたら姉が少しでも前向きになってくれるだろうか。と悩んでいた時、病室のテレビに映っていたピアノのパフォーマンスを見て、姉はもう一度ピアノを弾きたいと言ってくれたのだ。それは姉の願いであると同時に、私自身の夢を叶えるチャンスでもあった。だから私は迷わず二人で演奏しようとしたのだが、現実に残酷だった。姉の手足にはすでに麻痺がはじめていたのだ。進行性であるため、練習を重ねる毎に改善するとは限らない。けれども私は諦めたくなかった。演奏する曲はシューベルトの「アヴェエマリア」に決めた。「どんなに辛い苦しい世の中でも、祈りと信仰の心を忘れずに生きていこう」という力強い歌詞と、美しいメロディーが氣に

入っていた。早速楽器店へ行って譜面を購入し、さらに弾きやすく編曲した。

しかし当然のことながら、練習は思う通りには進まなかった。私は伴奏の一部とペダルも担当することになったため、余計合わせるのが難しく苦戦した。焦りと苛立ちが募り、ついため息が出ることもしばしば。「姉は無理して私に付き合ってくれているのではないか……」と不安になることもあった。だがなんとか三か月後、最後まで通して弾けるようになった。するとそれを知った担当看護師の方が、ある提案をしてくださった。病院内の一角で、連弾を披露してみてもいいのだ。人前で演奏できる自信はなかったが、ソロコンサートを開くことは姉の夢でもあった。「入院中の方やそのご家族に、少しでも喜んでいただけるのなら」と、引き受けることにした。

本番当日。小児病棟のプレイルームには予想以上に多くの人々が集まってくださった。緊張は一気に高まったが、私は「間違えても大丈夫。今日は演奏を思いっきり楽しもう」と姉に声をかけ、いざ舞台へ。姉が前奏パートを弾き始める。魂が癒されるような美しい音色に合わせ、私も歌詞に込められた願いを届けるように歌いだす。例えば二人でピアノを習っていた子供時代。めきめきと上達し、いつも褒められていた姉に嫉妬していた時期もあった。優秀な姉と比べられるのが嫌で、意地を張っていたこともあった。けれども今この瞬間、二人の間に一切のわだかまりはなく、ただ穏やかな時間だけが流れていた。この瞬間を大切に刻むように、一音一音心を籠め、

丁寧な音を紡いでいく。幼い頃からの思い出と今までの練習の日々がよみがえり、こうして二人で演奏できることの感謝と喜びで胸がいっぱいになった。途中、何度も声に詰まりそうになったが、演奏を終えると温かな拍手をいただいた。スポットライトもステージもなかったが、姉の笑顔は誰よりも輝き、私たちにとって忘れられない演奏会となった。

それから四年後。姉は長い闘病生活のすえ天国へと旅立った。辛いリハビリも、この経験があったからこそ乗り越えられたのだと思う。何度も書き込みを重ねてポロポロになった譜面は、私たちの勲章であり宝物だ。二人の夢を叶えたあのメロデーは、今でも心が折れそうになると私を慰め励ましてくれる。これからも決して鳴りやむことのない、私の応援歌だ。

優秀賞

それぞれの夢

愛媛県松山市 栄直美 さかえ なおみ

「人の夢と書いて、はかないって読むんやで」
何の事かわからず、ポカンとしている私に彼はノートに達者な字で書いた。『儂い』。

私が小学五年生の時の出来事であった。授業中、唐突に話しかけ

て来た隣の席の男子。彼は周りの児童たちから一目置かれる存在だった。一学年、百六十人弱の児童が居る中、成績は常に一番。代々医師の家系で彼も医師を目指すべく県外の中高一貫校に進学する準備をしていた。人口一万人程の小さな町。しかも五十年前。ほとんどの児童が中学受験の存在さえ知らなかった。中学から県外で生活する彼は皆の羨望の的だった。

彼の隣の席になって一カ月。彼にとって私など眼中に無いらしく、殆ど会話はなかった。それがいきなり話しかけて来たのである。しかもその内容は私にはとても難しかった。どう返答してよいかわからず戸惑う私に呆れたのか、彼は再び授業に熱中し、以後私に話しかける事はなかった。初めて耳にした、儂いと、言う言葉。意味はわからなかったけれどその言葉の持つ妙に物悲しい響きがいつまでも頭から離れなかった。

小学校卒業と同時に彼は県外へと旅立った。その後、見事医師となり、海外に赴任中と風の便りに聞いた。狭い町で彼の噂は途切れる事が無かった。彼の突然の訃報を聞いたのは、三十五歳の時だった。あまりの事に皆、言葉を失っていた。私は知らなかったのだが、彼は大学生の時、御両親と弟さんを亡くしていた。身内は妹さんだけになっていた。彼の冥福を心から祈った。と、同時に私の脳裏に小学生時代のある出来事が浮かんできた。

小学校卒業記念行事として、私たちのクラスはお芝居をする事になった。もちろんリーダーは彼。何でも一番にならないと気が済まない彼は練習にも熱心だった。学校が休日の時は彼の家が練習場に

なった。農家が多く、昔ながらの古い家が建ち並ぶ中、レンガ造りのお洒落な洋館は一際目立っていた。男子たちは練習そっちのけで広いリビングや廊下を走り回っていた。そして女子たちは、こっそり彼の部屋を覗いていた。私もその一人。参考書、辞書、図鑑などが本棚にびっしり並んでいた。マンガの本は一冊も無かった。

その時、私は一冊のスケッチブックに目が留まった。はしたない事とはわかっていたが誘惑に負けページをめくった。抽象画が水彩絵の具で何十枚も描かれていた。普段のクールで取っ付きにくい彼の印象と異なり、その絵たちはとても暖かく優しい色彩に満ちていた。いつまでも眺めていたいそんな絵だった。

ふと思った。彼は本当は絵に携わる職業に就きたかったのではないか。しかし、家業を継ぐ事を宿命と信じ医師の道を選んだのではないか。

「人の夢と書いて、はかないって読むんやで」

彼の言葉が甦る。だがこれは私の勝手な妄想に過ぎない。彼はりっぱな医師になる事を天命と信じ努力を重ねていたのかもしれない。あの水彩画たちは勉強に疲れた彼の、ただの気分転換だったのかもしれない。それは、彼にしかわからない。

彼が亡くなった時、私は二人の息子たちの子育て真っ最中の時期だった。幼い私が友人たちに将来の夢を話すと、皆、怪訝な顔をした。私の夢はいつも子供の側に居てあげるお母さんになる事だった。当時、専業主婦が大半を占めていた時代。祖父母、両親、兄妹などの大家族が当たり前。だが、我が家だけ違った。母一人子一人。私

には母以外の親族は居ない。皆がお盆やお正月に帰省する中、私だけがポツンと取り残された。当然母は仕事。いつもの公園が何倍にも広く見えた。

友人たちにとって、母親がいつも側に居る事は当たり前の環境。夢などでは無い。しかし、私にとって、どうしても叶えたい夢だった。念願叶い私は二人の息子の母親になった。息子たちを膝に乗せ絵本を読む。彼らの日向の香りに包まれ私はとてもしあわせだった。病気の時は片時も離れず看病できる。自分が母親になり、母の事を考える。女手一つで私を育てるため働き詰めだった母。甘える私の相手をしたかっただろう。病気の時は看病をしたかっただろう。しかし、仕事は休めない。心を鬼にして出かける事の辛さ。心の中で何度泣いただろう。

母は家庭の事情で学校に通えなかった。私が就職した頃から独学で漢字の勉強を始めた。私が嫁ぐと今度は英語を学び始めた。教科書辞書すべて私のお古。ノートはチャシの裏。そんな母に少しでも恩返しがしたく、ハワイ旅行を計画した。私も同行したのだが、ツアーの人たちとすぐに打ち解け、現地の人々にも物怖じしないで話しかける積極的な母の姿に驚き意外な一面を見る事ができた。こっそり水着を持参していた母。昔、ポスターでハワイの海を見て以来、この海で泳ぐ事が夢だったと初めて聞いた。優雅に泳ぐ母を見て思った。人の夢は決して儚くなんか無い。

夢の空を飛ぶとき

神奈川県小田原市

古川 晴菜ふるかわ はるな

夢はあらゆる「ない」から始まる。ありえない、足りない、存在しない、みたことがない、経験したことがない。「無」を「有」に変えたいという願いを胸に抱いて未知の世界へ飛び出すこと、それが夢を追求めることだと私は思う。私はある映画がきっかけで空に心を奪われた。そして、空を飛んだことが「ない」を「ある」に変えたいと願い未知の世界へ飛び込んだ。

数年前、私は小さな映画館で『イントゥ・ザ・スカイ 気球で未来をかえたふたり』という映画を観た。この映画は、十九世紀後半のイギリスで気象学者と気球操縦士が気象学研究と世界的新記録達成のために前人未到の高度まで気球で上昇するという冒険物語である。本作は実話からインスパイアを受けおり、リアリティを追求して映画の撮影はほとんど空中で行われている。

地上の音を伝える霧、雲に映る気球の影とその周りを囲う虹の輪（ハロ現象）、空高く上昇した気球と同じ高さで飛び続ける蝶々、突然降る雪……。空を舞台に幻想的なシーンが続くのだが、（誇張されている部分はあるものの）すべて現実でみられる現象である。私たちの上に広がる空はロマンに満ち溢れている。そんなふうに感じられて、私は空の世界にすっかり魅了されてしまった。

「私も空を飛んでみたい。ロマンチックな世界がこんな身近にあるのなら、実際に見てみたい！全身で空を感じてみたい！」気がつけばそんな夢を抱いていた。

映画を観てから数日後、私はいよいよ空を飛びたいという想いを抑えきれなくなってしまった。気球乗り体験や空を飛ぶスポーツについて調べていると隣県にパラグライダースクールがあるということがわかった。当時は新社会人目前、新生活に向けて少しでも貯金しようとアルバイトをしていたのだが、その一部を講習代に充てることに決め、さっそく講習の予約をとった（そのおかげで、四月から始まった新生活は少しだけ厳しいものになってしまったのだが）。

空に思いを馳せながら多忙なアルバイト生活を乗り越え、ついにスクールに行く日がきた。しかしすぐに空へ……というふうにはいかなかった。スクールに到着してからは気流が安定しない日が続いた。その間、低い丘で実技練習を受けたり、気象学について勉強したりして夢が叶う日待った。山の上にある滑走台から飛び立つことができたのはスクールに来て三日目のことだった。

いざ滑走台に立つとそれまで感じていなかった恐怖が襲ってきた。夢を叶える寸前で怯えるなんて自分でも驚いた。それでも覚悟を決めて滑走台を走った。次の瞬間、私はキャノピーに引っ張られ、空へと舞い上がった。

滑走台に立ったときの恐怖はすっかり消えていた。顔を上げると視界はロマンチックな青色に包まれた。空の上は自由だった。私の周りには誰もいない。私ははしゃぎながら大声を出して、全身で解

放感を味わった。

上昇すればするほど気温が下がっていくのがわかった。三月下旬なのに冬が舞い戻ってきたような寒さだった。冷たい空気が体にまとわりついて肌を刺す。温度感だけでも空は地上とは別世界だった。今、私は恋焦がれ夢見た世界の中にいる……。

現代の私たちはテレビや映画、インターネットなどデジタルの世界を介して多くのことを知ることができる。上空を撮影した映像はこれまで何度も目にしてきたし、飛行機に乗って空を飛んだことだってある。夢のきっかけも一本の映画だった。けれども結局それはフィルターを挟んだ、五感が制限された世界でしかなかった。視界のすべてが青くなる瞬間、肌を刺す寒さ、浮揚感……生身で体感する空は想像を超えた世界だった。夢を叶えるというのは、頭の中で描いた想像や想定を遙かに超えたなにかを直で体感するということなのだ。

インストラクターの方になぜ講習を受けたのかを聞かれ、経緯を話したら「有望なお転婆娘だなあ」と言われた。そうか、たしかに私はお転婆娘だ。空を夢みて、気がつけば隣県まできて本当に空を飛んでしまったのだから。だが、夢を叶えようとするとき、みな誰しも想像やそれまでの自分自身を飛び超えていくものだ。

夢を追うことは人間が空を飛ぶことと似ている。人間は翼をもたない生き物だ。ゆえに人間は知らない、見たことのない、経験したことがない空の世界に憧れる。「ない」は夢の出発点だ。未知を既知に、不可能を現実、無を有にしたいと願うとき夢は生まれる。

だが、夢という名の空を飛ぶためには私たちは翼をもたない自らの限界を超えなくてはならない。私が滑走台に立ったときのように、失敗する恐怖を感じたりするかもしれない。それでも勇気を出して未知の世界に向かって飛び出したその瞬間、私たちは夢の空へと舞い上がっていく。そこにはいつだって自分の限界、想定や想像を超えたロマンに満ち溢れた世界が広がっている。

佳作

転回場

大阪府堺市 相野^{あいの}正^{ただし}

昭和三十年ごろ、私が住んでいた四国最北端の碑がある村と大きな町の間には、一日何本かのボンネットバスが走っていた。

春になると私は毎日バスを待っていた。それは理由があった。両親のいない私は小さな寺の住職をしている曾祖父母に育てられ、遠い都会で働く祖母が仕送りをしてくれた。その祖母が年に一度の春先、都会から夜の瀬戸内海を渡る客船で町に着き、そこからバスに乗って帰って来るのだ。待ち遠しい日々だった。だが当時電話がある家は少なく、しかも遠方へは交換手に申し込んで長い時間待たねばならなかった。だから連絡はいつも手紙。それも「三月のはじめごろ帰る」などというアバウトなものだった。

私が待つのはいつも午後。バス転回場のある終点だった。その終

点から急な坂を少し上ると家だ。やっと来たバスに祖母が乗っていないとがっかりするが、祖母がお土産をいっぱい抱えて下りてくると、私はその荷物を持って祖母の手を引き、一緒に坂を上る。それが嬉しくてたまらなかった。

小学生になる年、三月に入ると私は毎日バスの終点で待っていた。その日もバスが終点にやってきた。ドアが開いても祖母は降りてこなかった。車掌さんがトイレに走る。中年の運転手さんが窓から私に声をかけた。

「ぼく、バスが好きか？」

声をかけられたのは初めてだったので、びっくりしたがこくりと頷いた。

「毎日来とるのう。バスが好きか？」

その人は私に気付いていた。そしてニコニコしながらなぜ毎日ここへ来るのか聞いた。

「婆ちゃんが帰って来るけん」

バスも好きだが、いつもひとりだから寂しく、早く婆ちゃんに会いたいことを話した。

「そうか。それで毎日きとるんか。それやったら、ちょっとおいで」
そう言っ、私を手招きした。「ここへ座ってみ」最前列の運転席の横の席へ座るように言った。「え、いいん？」と私。「内緒やで」と彼は笑う。

腰のタオルに「オハラ」と書いてあった。尾原さんだ。私は興奮した。尾原さんは帰ってきた車掌さんの笛に合わせて、鮮やかなギ

アチェンジとハンドルさばきでくると方向転換した。私は最前列でひとり、噂の尾原さんの転回の体験をしたのだ。

友達が羨ましがらう。尾原さんは、村人の間では有名な運転手さんだった。でも細い山道をアクロバティックな運転をするのではない。発車のときは客がつんのめらないような滑らかなギアチェンジで走りだし、停まるときはコップの水も揺れないように停車させるといふ。さつきもそうだった。この噂は町へ通う人たちの間で広まり、私でもその存在を知っていた。目つきが鋭く無口で、怖そうな人。そう聞いていたが違った。

その後も毎日通ったが祖母は降りてこない。でも尾原さんとたくさん話す中で、誰にも言えないことが聞いてもらえた。

曾祖父の爺ちゃんは私に住職を継げと言うのだが、坊主になるのは嫌だと思っている。ついそんなことまで口にしてしまった。

数日後、やっと祖母は尾原さんのバスで帰ってきた。嬉しそうに祖母を出迎える私に、彼は運転席から笑顔で手を振っていた。

やがて小学校の入学式があり祖母が出席してくれた。その日も私の足は転回場に向いて、尾原さんに報告した。

そしてついに祖母が都会へ帰る日が来た。今までなら泣いていた。泣いたらあかん、という声がどこかで聞えた。

転回場には、町へ帰るバスが待っており、運転席には尾原さんがいた。寂しそうな顔をしている私に、窓から「これ」と彼が何かを出した。

「ワシ、転勤になるんや。もうここへは来れないけん。だから傷ん

でるけど、これあげよか？」と尾原さん。白い手袋だった。

「うん」。私は泣くどころか笑顔になった。

「ワシも母親を早く亡くした。ええか、まず自分のやりたいことを自分で決めるんや。それが先や。それが『夢を持つ』ということや。それに向かって頑張るんや。寂しいことを言い訳にしたらいかんけん」

町へ帰っていく祖母を乗せた尾原さん運転の無骨なバスは、柔らかな春の日差しを浴びてゆっくり、ゆっくりと動き出した。私は大きく手を振って見送った。村には茹でたイカナゴの匂いがたなびいていた。

寂しいと思い続けていた私にとって、祖母は母、そして尾原さんは兄のように思え、幸せで勇気づけられた季節になった。

それ以後、尾原さんは来なかった。

だが少し傷んだ手袋に触っては、どんな辛いことがあっても、親兄弟がいらないことを言い訳にはしないとと思った。尾原さんのように自分で決めた目標を持ち、努力して何かに秀でて生きようと誓った春になったのだ。

佳作

戦国武将という仲間たち

東京都多摩市 郭瑞昕^{かく ずいしん}

今では戦国武将の事実を解き明かすことが夢である私ですが、始まりはほんのちよっとしたきっかけでした。

私が初めて戦国武将という仲間たちに出会ったのは小学一年生の時、学校の図書館でのことでした。当時は歴史漫画が学校でのブームとなっており、何が面白いのだろうと思ったことがきっかけでした。そんなちよっとしたきっかけで、織田信長の本を手にとって読んでみたところ、度肝を抜かれました。こんな人物がかつての日本にいたことが信じられないと。そののちは急速にこの戦国武将たちの世界に引き込まれていきました。今考えてみれば、自分と非常に遠い世界、まるでミニチュアの世界を覗き込むように客観的に楽しんでいただけかもしれません。しかしこれが長い私と戦国武将という仲間たちとの人生の始まりでした。

小学生の頃は、大学生となった現在ほど行動の幅も広くなく、また現在ほど情報も入ってこなかったため、伝記や歴史漫画を読んだり、歴史の授業を聞いたり、テレビや博物館など限られた中から、精一杯情報をかき集めて戦国武将の世界を楽しんでいました。「織田信長は短気である」や「徳川家康は我慢強い」など、歴史の表面的な部分を一通り探し出して楽しんでいました。そのころから毎日

のように新しく発見した知識を母親に話してその反応を見ることが習慣となっていました。驚いたり、感心したりと話を懸命に聞いてくれたり、戦国武将を好きになってくれたりと、母と戦国武将の話をする時間は、その当時から今もずっと至福の時間です。

中学に上がるころには、インターネットを使えるようになってきて、より多く情報が入ってくるようになり、もっと深い歴史の情報が入ってくるようになりました。学校の授業でも、より深い歴史の話をするようになり、戦国武将の話を扱う回では、歴史の授業の時間が楽しみでなりませんでした。そして、だんだんと先生たちが話す戦国武将の話を自分が既に知っていることが多くなり、自分が話す戦国武将の話に先生たちが驚くようになり、その時は戦国武将の知られざる一面を知っている自分が誇らしくなったことを今でもよく覚えています。中学生であった頃は、受験に部活に忙しく、小学生であったころよりは戦国武将に使える時間は少なくなりましたが、自分へのご褒美の時間として戦国武将の伝記を愛読しており、つらい時期も戦国武将という仲間たちは常にそばにいてくれました。

高校生になると戦国武将という仲間たちは表情を変えてきました。きっかけはもっとより戦国武将について知りたいと思い、他の戦国武将好きの方のブログや、戦国武将好きが集うサイトを見るようになったことでした。そこに書いてあった参考文献や資料を読み漁るうちに、戦国武将は自分が知っている歴史とは違う一面があるということに気が付きました。たくさんの資料を読んでいると、織田信長は単純な短気な人ではなく、「不正を許さず厳しく罰する」

傾向にあることに気がつきました。そして徳川家康もただ我慢強いではなく、激しい気性ではあるが、「つらい経験から我慢することに努めようとしている」ということに気がつきました。どうやら私はあくまで定型化された、歴史の最も目立つただ一面を見ていたようです。それ以降、私と戦国武将との向き合い方は変わりました。有名な情報を鵜呑みにするのではなく、一方からだけでなく他方からも見てみる。習慣であった母と戦国武将の話をする時間も、ただ一方的に私が話すのではなく、母がどう思ったか、母ならどう判断するかといった母の意見も聞くようになりました。そうすることで自分が見逃していた一面を見ることができるようになりました。そういうことを繰り返していくうちに、今まで見えてこなかった戦国武将という仲間たちの本当の事実や、思いまでもが見えてくるようになりました。もちろん、すべてが本当の事実や、真実ではないかもしれませんが、少しでも彼らが持つ思いに近づくことができました。ことは、私にとつての大きな第一歩だと思います。

確かに戦国武将は遠い昔の人々ですし、今は生きていない人物たちです。しかし、初めて出会った日から、現在に至るまで、様々な形で私のそばにいてくれました。楽しい時もつらい時も片時も離れずにそばにいてくれ、様々な成長をさせてくれた彼らのことは、私にはただの遠い昔の人物とはどうしても思えず、まるでずっと共に生きてきた仲間たち、「戦国武将という仲間たち」のように思えます。その仲間たちと接するうちに私にはとある夢ができました。それは、「戦国武将の本当の事実を解き明かしたい」という夢です。

事実を解き明かすことで、そこに秘められた思いも解き明かすことが出来ます。その事実と思いを解き明かすことで、戦国武将という仲間たちが後世に残してくれたものを正しく受け取ることができると信じています。そしてそれを受け取ることでも今を生きる私たちにつなげること、それが私の夢です。

大学生となった今、私は戦国武将という仲間たちと共にその夢に向かって進んでいます

佳作

出会えた夢

滋賀県栗東市 佐藤 寿江^{さとう じゅえ}

『夢』と聞くと、私は小学校の卒業文集を思い出す。クラスメートたちは「将来の夢」と題して作文を書いている子が多かった。その作文たちは生き生きときらきらしていた。私は何を書いていいのかわからず仕方なく海のポエムを書いた。

私は自己肯定感の低い子どもだった。それは父から「勉強ができて役に立たない子」と常に言われていたからだ。両親に褒めてもらいたくて気を利かしたつもりが空回りをしてよく叱られた。私は父が怖くて、自分の思いを伝えることができないまま大人になってしまった。そんな私に人生の転機が訪れたのは、病院の受付事務として働いていた二十二歳の時のことだった。

病院の待合には車椅子に乗った患者さんをよく見かけた。その姿を見る度に、病気が治っても歩けないと困ることが沢山あるだろうなあと思っていた。母が癌を患い、手術をしたこともあり、もし、母が同じ様に車椅子を必要とする身体になった時には家でのように暮らせばいいのだろう。困った時はどこに相談をすればいいのだろう。そんな疑問を持っていた。職場の先輩に尋ねても答えは返ってこなかった。ならば自分で調べてみようという図書館に行った。

図書館の司書さんに尋ねると、福祉の本棚があると教えてくれた。そこで医療と福祉の専門職と書いてある本を見つけた。その専門職の中のひとつに社会福祉士という職種があった。「社会福祉士とは、病気や障害、高齢になることで生活に困った人の相談に応じ、社会保障制度などを活用することで、生活課題を側面的に支援する専門職」と書かれてあった。生活を支援するということは、困っている誰かの役に立てるということなのか。これまで父には「役に立たない子」といわれ続けてきた私にでも、何かできることがあるのだろうか。この時、私は自分の中で何かが揺れるのを感じた。心の奥底に「役に立ちたい」という強い思いが眠っていたことに気がついた。この気づきがきっかけとなり、私は社会福祉士の仕事に就くことを『夢』にしようと決めた。

社会福祉士は国家資格になるため資格を取得するにはいくつかの要件があった。私は貯えに余裕がなかったので働きながら学べる通信教育の大学を選んだ。入学は二十四歳の時だった。その頃はいわゆるバブリーな時代で、周りは華やかな雰囲気だった。当時の女

の子は二十三歳頃に寿退職（結婚退職）をすることが花形でよしとされていた。そんな時代を横目に、私はアルバイトをしながら、レポートとテストに追われていた。その努力は報われて、留年をせず無事に卒業ができた。そして、念願の社会福祉士の資格を取ることができた。これまでの私は、自分で何かを選択し、行動を起こすことがなかった。何かに打ち込むということもなかった。だから、社会福祉士の合格通知が届いた時は最高に嬉しかった。涙が溢れ出た。途中で何度も断念しかけたが、最後まで諦めずにやり遂げられたのは、通信教育で知り合った仲間たちの熱意に刺激を受けたことと、母や妹、友人からの応援のおかげである。両親は私が入学した翌年に離婚をした。父とはそれ以来、会ってはいない。母には経済面では苦労をかけていたと思う。私は周りの人たちに支えてもらった。今でも感謝の気持ちでいっぱいである。

夢を達成できた後は、自分に少しだけ自信が持てるようになった。少しの自信を原動力にいくつかの資格試験にチャレンジをし、合格することができた。人は変わることができるのだと実感した。

私は病院の相談員を経て、今は福祉施設の相談員として働いている。五十代半ばとなり、ベテランといわれるようになったが、日々、悩むことは多い。だが、この仕事を通じて、人と人とのつながりの大切さと、価値観や個性には違いがあつていいのだということを学ばせてもらった。それから、父に対する思いにも変化が起きた。父は父なりに苦しみがあつたのかもしれない。自分が親という立場になり、そう思えるようになった。

もし、毎日がつまらなくて、どうしたらいいのかわからないと悩んでいる人がいるのなら伝えたい。何気ない毎日の中にでもふとした瞬間に自分のアンテナに何かが触れるような出会いがあるかもしれない。だから、焦らず自分を諦めないでほしい。

小学生の時、クラスメートたちのように卒業文集に将来の夢が書けなかった私。でも、長い月日を経て、私なりの卒業文集がここに完成できたように思う。この『夢』に出会えたことに感謝をしたい。私は今、新たな夢を持っている。それは定年後、海の近くで暮らすということだ。

夢を見つけることは楽しい。夢は叶う。

佳作

この一筋につながる

福岡県飯塚市 三宅隆吉 みやけりゅうきち

「この一筋につながる」松尾芭蕉の言葉である。短いが、人生を浪費しないための支えとなる言葉だ。何をやるか、どのような夢を持つのかは、高齢の私（83歳）にとっては、対象が限られてくる。つながるべき「この一筋」は何だろうか。人それぞれにあるべきだ。

晩年両足を痛め、障害者になった。高齢の私にとりやりたいこと、その夢は書道であった。

晩学の楽しみ

五十五年間の勤務生活を送った。退職し、何か一つ、芯の通った趣味がないかと思っていた時に出会ったのが書道である。

きっかけは毛筆で認めた年賀状を戴いたことであつた。美しく品格のある字、そしてその余白の美しさに見惚れていた。一念発起し稽古を始めた。楷書、行書、草書、篆書、隸書、仮名 変体仮名等学ぶことは多い。

幸い学生時代に稽古をした実績があつた。妻が書道の師範であつたことも恵まれた環境であつた。

一隅を照らす、これ国の宝なり

日頃は菩薩のように優しい妻が稽古の時は変わった。鬼に変わった。

姿勢、筆の握り方、各書体に応じた、運筆の要領等、書道の幅、深さを教えてくれた。

日頃穏やかな日常生活であつたが稽古の時間だけは違った。教える方も、習う方も真剣であつた。

今老人ホームの皆様とそして自宅で近所の児童を集め稽古をしている。書道は足が不自由でも頭と手が動けばできる。

書道のよい面は手本の中に名文や優れた詩句が出てくることである。

座右の銘とする言葉の手本を求めたのが伝教大師、最澄の言葉であつた。

「一隅を照らす、これ国の宝なり」とあつた。

「与えられた仕事で光輝くそのことが、国の宝だと伝教大師は説かれている。組織は与えられた仕事を目立たないがきちんとやる人のお陰で成り立っているのだ」と言うことであろう。

老人ホームの皆様方は、先の太平洋戦争で辛い経験をされた方が多い。稽古が終わった後で、さりげなく話をして頂くことは私にとり貴重な時間である。

今年も終戦の日（八月十五日）が巡ってきた。この時期になると鹿児島県の知覧特攻平和会館を訪れた日のことを思い出す。国に殉じた青年たちの遺書が残され、国のために死ぬ覚悟が述べられていた。父母へは「先立つ不孝をお許し下さい」弟妹には「私に代わり両親に孝養を尽くして欲しい」と記されていた。この世の楽しみを何ひとつ知ることもなく、家族や国の将来を想い、従容として散って行った若者達。遺書を読みながら涙が止まらなかった。私達はこの青年達が願っていたような国づくりをしてきたのであろうか。

人間の節目をつくる

人間も竹が伸びてゆくときのように、成長の過程で節をつけてゆく。その節はいろいろなもので付けられる。本を読み終わって、すっかり感動して、あとでふりかえってみたら、痛切な経験、小さな風景、それが節になる。早春の黒土に、露の葦が頭を擡げている。周りには雪が残っているのに、黒い土を割って、春の芽が伸びようとしている。そんな風景を見て「ああ、生命って、すごいな」と感じ

てしまう。それが自分の生命を自覚させる。人知れずひとつの^ノ節々をつくることになる。私にとっては楷書、行書等の一つ一つの書体を学ぶことが一つの節であり、夢であった。

これからの夢

これからは、書道に関連した篆刻^{てんくわく}、水彩画、表装、陶芸などを学ぶつもりだ。妻が先生役になってくれるのは従前通りである。

八十三歳と七十七歳の高齢者夫婦が書道の稽古を通してメリハリのきいた緊張の時間を持つことはありがたいと思っている。厳しく適格に指導してくれる妻の姿に、尊敬を込めた【ときめき】を感じるときもある。

未だ道半ばの私であるが松尾芭蕉の「この一筋につながる」の言葉に出会えたことを感謝している。まさに人生を浪費しないための支えとなる言葉であった。

今後は書道という日本独自の優れた伝統文化を多くの人へ伝えたい。「教えることは学ぶこと」。私自身も成長したい。これが私の夢である。ややもすれば、閉塞感の漂う今の日本で、多くの人が、日本人としての誇りや自信を書道を通して取り戻して欲しいと願っている。

今夜は颯爽とした妻の姿が夢の中に出てきそうである。



下田歌子賞について

下田歌子賞は、平成十六（二〇〇四）年に下田歌子先生生誕百五十年を迎えるにあたり、下田歌子先生のふるさとである旧岩村町（現在の岐阜県恵那市岩村町）が岐阜県、実践女子学園、PHP研究所の協力を得て、下田歌子先生の業績を顕彰しつつ、エッセイ募集を通して、これからの生き方、考え方、教育のあり方を、共に考え学ぶために設けた公募賞です。平成十五年度の第一回募集以降、毎年全国各地から多数の秀作が寄せられています。

審査経過報告

本年度の下田歌子賞は、昨年度に続いて「夢」をテーマにしました。「夢」というテーマは、下田歌子先生が、故郷・岩村を後に東京へと旅立つ時に詠んだ「綾錦の歌」にのっとったものであるのに加えて、第二十回、第二十一回という節目の年のテーマにふさわしいこと、そして何より、令和二（二〇二一）年の年初より続いたコロナ禍が少しずつ落ち着きを見せ、新しい時代への胎動が感じられる時代相を見据えての募集です。六月から九月までの四か月間の募

集期間で、エッセイの部は、小学生の部二三九作品、中高生の部一二九七作品、一般の部二〇五作品が全国より寄せられ、恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会による事前選考の後、作家の童門冬二氏を選考委員長に、東洋大学名誉教授で、わが国中国思想史・日本近世思想史研究の泰斗・吉田公平氏、元宝塚歌劇団員で恵那観光大使の初風緑氏、実践女子大学・実践女子大学短期大学部の難波雅紀学長、月刊誌「歴史街道」（PHP研究所）特別編集委員の寺田昭一氏、小坂喬峰恵那市長の六名の審査委員による最終審査の結果、各部、最優秀賞一作品、優秀賞三作品、佳作五作品の九作品を受賞作品に決定しました。また、小学生の部一作品に嚶鳴協議会賞を授与しました。

短歌の部は、小学生の部一二七九首、中高生の部一一三五首、一般の部四二二首が寄せられ、恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会の事前選考により各部十作品を候補として絞り込んだ後、選考委員による最終選考を行ない、各部、最優秀賞一首、優秀賞一首、入選三作品の五作品を入選作品としました。

学校賞の授与について

平成三十（二〇一八）年度の第十六回下田歌子賞より、「学校賞」を授与しています。この賞は、「エッセイの部」「短歌の部」いずれか、または両方に学校で取り組み、顕著に応募数の多かった学校に授与させていただく賞で、本年度は、十七校に記念の盾を贈呈しました。

表彰式と記念イベントについて

下田歌子賞の表彰式は、平成十五（二〇〇三）年度の第一回以来、第四回目の実践女子大学での開催以外、下田歌子先生のふるさと岐阜県恵那市岩村町で開催してきましたが、令和二（二〇一九）年度の第十八回以降は、コロナ禍に配慮して恵那文化センター大ホール



【上】主催者挨拶（小坂喬峰恵那市長）
【中】選考委員記念トーク 【下】源氏物語講話

で開催。

コロナ禍も落ち着きを見せた本年度は、第四回目以来十七年ぶりに実践女子学園で表彰式を実施。令和六（二〇二四）年一月二十七日土曜日に東京都渋谷区の実践女子学園中学校高等学校桃夭館（とうようかん）講堂で行なわれた表彰式では、オープニングに実践女子学園中学校高等学校吹奏学部が演奏を披露。各賞の表彰の後、選考委員による記念トークと、実践女子学園が創立以来約百二十五年にわたり取り組んできた源氏物語研究にちなみ、実践女子大学文学部国文学科佐藤悟教授による「源氏物語講話」が開催されました。

岐阜県恵那市と実践女子学園の連携協定

下田歌子先生を学祖とする実践女子学園と先生の生誕地恵那市は、先人顕彰事業「下田歌子賞」をはじめ、中学生の修学旅行や大学・短期大学の夏季セミナーなど活発な交流が進められてきましたが、さらなる相互の学術・文化の向上と地域の振興に寄与することを目的として、平成二十二（二〇一〇）年十一月二十七日（土）、第八回下田歌子賞表彰式・記念イベントに合わせて、連携協定を締結。恵那市市制十五周年・実践女子学園創立百二十周年を迎えた令和元（二〇一九）年には、五月七日に恵那市岩村町の下田歌子先生生誕の地で実践女子学園百二十周年記念式典を挙行。下田歌子賞（第十七回）も恵那市市制十五周年・実践女子学園創立百二十周年記念事業として開催されました。

下田歌子賞 各回のテーマと応募数一覧

◆エッセイの部

回	年度		テーマ	応募数		
	年号	西暦		小学生	中高生	一般
第1回	平成15	2003	「男らしさ、女らしさ」	245	48	185
第2回	16	2004	「出会い」	40	102	201
第3回	17	2005	「私の誇る恵那市のよさ～その美しい心と伝統」	※32		
第4回	18	2006	「心に残る父・母・祖父母の教え」	34	384	358
第5回	19	2007	「父・母・祖父母・兄弟・子どもたち～忘れられないあの一言」	95	219	285
第6回	20	2008	「家族への思い」	97	886	311
第7回	21	2009	「先人に学ぶ」	103	181	71
第8回	22	2010	「先人に学ぶ」	46	190	72
第9回	23	2011	「先人に学ぶ」	92	586	100
第10回	24	2012	「母」	57	608	189
第11回	25	2013	「ふるさと」	63	565	128
第12回	26	2014	「ふるさと」	57	535	81
第13回	27	2015	「家族」	87	1,283	166
第14回	28	2016	「家族」	184	1,050	197
第15回	29	2017	「志（夢・願い）」	187	1,092	94
第16回	30	2018	「志（夢・願い）」	242	1,036	128
第17回	令和元	2019	「志」	180	1,052	175
第18回	2	2020	「志」	115	1,188	222
第19回	3	2021	「志～今、伝えたいこと」	109	1,032	224
第20回	4	2022	「夢」	194	1,157	284
第21回	5	2023	「夢」	239	1,297	205

※第3回の全国公募は標語。エッセイは、恵那市の合併を記念して恵那市民を対象に部門別に分けて募集（全体の応募数を記載）。

◆短歌の部

回	年度		テーマ	応募数		
	年号	西暦		小学生	中高生	一般
第1回	平成15	2003	……	……	……	……
第2回	16	2004	……	……	……	……
第3回	17	2005	【標語募集】「家族みんなで考えよう～我が家の約束事」			
第4回	18	2006	……	……	……	……
第5回	19	2007	……	……	……	……
第6回	20	2008	……	……	……	……
第7回	21	2009	……	……	……	……
第8回	22	2010	「家族・思いやりの歌」	373	860	78
第9回	23	2011	「絆」	437	628	121
第10回	24	2012	「母」	257	1,000	174
第11回	25	2013	「ふるさと」	468	852	132
第12回	26	2014	「ふるさと」	687	1,150	59
第13回	27	2015	「家族」	1,830	2,404	146
第14回	28	2016	「家族」	1,491	1,507	183
第15回	29	2017	「志（夢・願い）」	1,473	716	91
第16回	30	2018	「志（夢・願い）」	751	1,606	210
第17回	令和元	2019	「志」	947	679	306
第18回	2	2020	「志」	999	844	326
第19回	3	2021	「志～今、伝えたいこと」	1,273	1,449	293
第20回	4	2022	「夢」	1,284	914	420
第21回	5	2023	「夢」	1,279	1,135	421

※第4回、第5回、第6回は、恵那市合併を記念して、「【写真の部】ふるさと再発見！ あなたが選ぶ恵那市の新名所100選」も募集。



募集チラシ（表面）



募集チラシ（裏面）

夢

第21回 下田歌子賞受賞作品集

2024年3月15日 発行
(2024年7月26日 一部更新)

恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会

(恵那市教育委員会生涯学習課内)

〒509-7292 岐阜県恵那市長島町正家1-1-1
TEL 0573-26-2111

学校法人実践女子学園 経営企画部

〒191-8510 東京都日野市大坂上4-1-1
TEL 042-585-8804

(株) PHP 研究所 文化事業部

〒136-8137 東京都江東区豊洲5-6-52
TEL 03-3520-9611 (代表)

【表紙「夢」の書】 神谷慎軒
【デザイン・印刷・製本】 丸理印刷株式会社

